

VII 体育指導補助員の活用について

体育指導補助員の活用について（大森第四小学校）

1 目的

児童が、安全に気を付けて運動に取り組むとともに、一人一人が分かる、できる楽しさを味わう。

2 低学年体育における現状と課題

体力調査によると、本校児童の体力は、国や都の平均値を上回る結果となっているものの、校舎改築に伴い運動に親しむ環境に制限がある。そのため、運動量を確保するための十分な時間がない。そこで、安全面に留意した上で、一人一人の体力・技能に応じた授業の展開が必要となる。

3 実践内容

(1) 水遊び

安全面に留意しながら、水につかって歩いたり走ったりしたりすること、息を止めたり吐いたりしながらもぐったり浮いたりすることをめあてとして実践した。新しいプールでの学習であったので、使用に際してルールの確認やその定着を図ることを徹底した上で、学習を通して水を怖がらずに取り組んだり、友達と関わったりすることができた。

(2) 器械・器具を使っでの運動遊び

マットや跳び箱などの準備や片付けでは、安全面の確保のために体育指導補助員の支援を必要とした。また、多様で魅力的な場で活動するために、グループを編成し、設定された場で工夫した。運動に親しむことをねらうためにチーム・ティーチングを取り入れ、一人一人の指導・支援及び評価をする必要があった。

(3) 走・跳の運動遊び

運動遊びが苦手な児童に対して、場の工夫をする必要があり、児童一人一人の実態を把握したうえで、より多様な場を設定し取り組んできた。また、思考面では児童が運動の仕方の工夫や、考えたことを友達に伝える方法を身に付けるために、チーム・ティーチング指導を取り入れた。

4 成果

安全面に留意した指導をすることができた。また、体育指導補助員を活用することにより、児童の個に応じた運動量の確保をすることができた。

5 課題

指導者が体育指導補助員と指導内容について事前に打ち合わせをする機会を確保することができなかった。そのため、より効果的な活用をする余地がある。書面で指導内容を伝えたり、具体的な補助の仕方など事前に共有したりできるようにし、体育指導補助員をより有効に活用していけるようにする。

体育指導補助員の活用について（中富小学校）

1 目的

- 体育教育を充実させ、児童の身体能力の向上を図る。
- 児童の運動への興味・関心を高め、生涯スポーツへの基礎を培う。

2 低学年体育における現状と課題

1年生は、就学前の経験によって運動能力に差がある。2年生も、1年の頃に比べると運動能力の向上が見られるが個人差は見られる。低学年児童は、できないことがあると意欲が持続しなくなる傾向がある。低学年の体育においては、全児童が様々な運動にすすんで取り組むことができること、一人一人にできた喜びを味わわせることが課題である。そのために、創意工夫のある楽しい体育授業、個別指導の充実が必要である。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使つての運動遊び

低学年では固定施設に慣れていない児童が多いため、担任と補助員で児童の安全管理を行うとともに、補助、アドバイスを細かに行うことで、固定施設での遊びへの興味・関心を高めることができた。

マット遊び・とび箱遊びでは、模範演技を児童に見せることで、上手に遊ぶためのポイントをつかませることができた。また、個別指導により、できる児童が増えた。

(2) 走・跳の運動遊び

ゲーム領域の「鬼遊び」とクロスさせ、担任、補助員が鬼遊びに加わることで児童の素早い動き、早い走り方を導く等の指導を行うことができた。

かけっこ・リレー遊びでは、速く走るためにどのような動きをすればよいのかのアドバイスを与えることで、走ることへの興味・関心を高めることができた。

(3) ゲーム

ボールゲームでの「投げる、蹴る」の児童の技能は、低学年段階から経験によって差があり、それが意欲に大きくかかわる。補助員は児童の技能を見取り、ボールが回ってこない児童にボールをパスしたり上手な児童にはアドバイスを与えたりするなどしてゲームを途切れないうちにさせ、ボール運動の楽しさを味わわせることができた。

(4) 表現リズム遊び

生活経験の少ない低学年児童には、動物の動きの特徴を捉えていないことが多い。補助員による師範により、イメージを捉えられやすくなり、楽しんで運動できた。

4 成果

体育指導補助員の活用により、小学校教育の基礎である低学年児童の体育への興味・関心を高められ、休み時間にはリレーや縄跳び等、学習していることを遊びにしている姿が見られた。これは補助員の存在とその人柄、児童への関わり方によるものが大きい。個人や集団への支援・助言、安全管理の面においても成果が得られた。

5 課題

今後も、体育指導補助員体制を継続することが課題である。存続できれば、さらに、よりよい成果を得ることができる。

体育指導補助員の活用について（大森第一小学校）

1 目的

生涯スポーツの素地を培うために、運動の特性に触れ、その楽しさを感じ、進んで運動に取り組む児童の育成

2 低学年体育における現状と課題

第1・2学年ともサポートルームに所属する児童が在籍し、集団行動を苦手であり、担任だけだと、授業を円滑に展開できない場面が多々見られるのが現状である。また、より教材教具を準備する予定が体調不良等の児童対応で時間が足りなくなり不十分になってしまうことが多いのも低学年によく見られるのが現状である。

3 実践内容

(1) 水遊び

第1学年の水遊びの授業開始からの1時間目～5時間目は、水を怖がる児童・プールに入れない児童を、完全に隔離し、体育の授業を実施した。本校は、通常の25メートルプールに加えて、水深50センチメートルの小プールを有している。その恵まれた環境を有効に活用し、先述の習熟度別体育科指導を実施した。その際、安全面での人員確保上、体育指導補助員の存在と教育効果は非常に大きかった。体育科の大きなめあてである「運動を楽しむ」での個人差が最も大きな領域が、水遊びの学習過程上の導入から初期の段階である。「やだやだ。こわい、こわい。」と大泣きで叫んでいた5～8名の児童を、この体育指導補助員の存在から企画実施された習熟度別体育科指導により、早い段階で「水遊び大好き」に変容させることができた。

(2) ゲーム

体育館でのミニアルティメット・ころがしドッジボール・チーム別まとあてあそび、校庭でのボール蹴り遊び、ねらって思いっきり投げるベースボール等では、ゲームのコートを2面作る場の設定がほとんどである。担任が両面指導するより、体育指導補助員も1面指導することにより安全面だけでなく、指導展開上も細かなルールやマナーへの指導も行き届き、円滑な授業が展開できる大きな要因となり、担任から非常に好評であった。

4 成果

上記3の記述通り、担任からの情報提供では、ゲームでの2面設定での体育指導補助員の活用が最も学習効果が大きかった。また、水遊びを始めとする安全面での活用も時間的には多くはないが、非常に効果が大きかった旨、報告を受けた。安全面が低学年ほど、重要度が高いため後述の安全面確保上、大きな価値があると考えられる。

5 課題

上述のように体育指導補助員の存在は非常に大きな価値があるが、その人材確保が非常に困難である。年度途中からの人材確保が加わったため、困難な状況であった。

体育指導補助員の活用について（開桜小学校）

1 目的

小学校第1・2学年における体育科の授業の改善・充実を図るため、児童に対して示範をしたり運動を補助したりするなど、第1・2学年の体育科の授業を支援する。また、授業の準備や片付け等の作業を補助することによって担任等の教員が効率よく授業を展開できるようにする。さらに中休みに児童の外遊びにかかわることによって、児童の運動量と運動経験を多くする。

2 低学年体育における現状と課題

本校の低学年の児童には、身体の発達や運動能力の状況に差が見られる。運動に対する意欲も必ずしも高い児童ばかりではなく、体育の学習や体を動かすことに対して抵抗がある児童もいる。また、運動経験の差は歴然としており、それらの児童に適した指導を行うために、教材（場）の準備や指導に当たる教員の目が多く必要である。

3 実践内容

（1）表現リズム遊び

リズム遊びでは、担任の指導した動きの行い方が分らなかった児童や活動に対する意欲の低い児童に対して支援に入った。また、つまずきのある児童に対しても、手本となる動きをして真似させる、一緒にやってみる等の支援を行うことで、技能や運動意欲の向上に役立った。

（2）水遊び

水泳指導は、準備・片付けや安全管理の面でも、指導者は多くいる方がよい。特に低学年段階においては、水を怖がる児童も少なからずいる。指導者の教員とともに、前向きな声掛けや支援を行うことにより、児童が安心して楽しく水に親しむことができるようになった。

4 成果

授業の準備作業（特にたくさんの用具を準備したり複雑なラインを引いたりする業務）は負担が大きく、運動量が十分に確保するために大変役立った。また、課題をもつ児童の支援することで教員が全体指導を行いやすくなるなど、体育指導補助員の活用は有効であった。

5 課題

概ね良好であったが、補助員（1名）が大学生であるため、時期によっては活用できないことがあった。また、複数の学級が同時に体育を行うようになっており、校庭・体育館を割り当てるのが難しかった。可能であれば、複数の補助員を同時に活用するなどできるようにしたい。ただし、要員の確保は、大変難しい。

体育指導補助員の活用について（大森第三小学校）

1 目的

低学年（1・2年）児童一人一人が体育学習に意欲的に取り組み、運動する楽しさを味わうことができるような授業の改善・充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

運動経験や運動能力において、入学時から個人差が大きい。集団行動や友達と関わりながら運動を楽しむ力も、十分に身に付いているとは言えず、指導も個別に対応する必要がある。安全を確保し、児童一人一人の体力・運動能力に応じた指導、授業を行っていくことが課題である。

3 実践内容

（1）器械・器具を使った運動遊び

跳び箱やマット、平均台等、多くの器具や用具を準備・後片付けをしなければならない。また、友達と協力して準備をしなければならないものもあるため、安全面への配慮も必要となる。そのため、体育指導補助員と連携により、授業の効率、安全性を十分に確保でき、様々な運動に意欲的に取り組むことができた。

担任だけでは個別指導しきれい場面が多く、指導補助員との連携により、運動中の細かい声掛けや補助ができ、十分な成果をえられた。

（2）水遊び

陸上での運動以上に、水遊びの経験や泳ぐための力に大きな個人差があり、水慣れの段階から、もぐれない、浮けない児童への個別の対応を行い、水への恐怖心を和らげることができた。学級担任と体育指導補助員を加えた4グループで、能力別の指導ができるため、少ない時間数を能率よく、効果的に授業を進めることができた。

（3）ゲーム

毎時間、用具の準備、場の設定（コートライン引き）時間がかかるため、指導補助員の役目は大きかった。また、勝ち負けが生じるゲームにおいて、多くの場合、友達との人間関係上の問題で授業が中断することがしばしばあった。コートや場ごとに指導者が付くことで、未然に問題を防ぐこともでき、楽しく授業をすることができた。

4 成果

- ・1単位時間の中で、本来児童が行わなければいけない準備や後片付けではあるが、安全面を考慮し、指導補助員が手助けすることで運動量が確保でき、学習効果が上がった。
- ・友達と仲良く、協力すること、きまりを守って運動すること、安全に準備や片付けができるようにすることに関して、きめ細かい支援ができた。

5 課題

- ・学年・学級の先生方と、十分な打ち合わせの時間を確保することが難しい。
- ・指導補助員が配置できる範囲が、1・2年だけでなく、3年以上の学年でも、補助員を必要とする学年・学級でも活用できると、さらに体育学習の充実が図れる。

体育指導補助員の活用について（大森第五小学校）

1 目的 体育授業の活動時に支援を要する児童の支援及び技能習得の補助とする。

2 低学年体育における現状と課題

低学年児童の多くは進んで体を動かすことが好きで、体育授業に対して抵抗感のある児童は少ない。その一方で、ルールのあるゲームやチームワークを要するゲームなどにおいて周囲と協調して運動することが困難な児童もいる。また、運動そのものに苦手意識をもち、安全に技能を習得することに課題のある児童もいる。

3 実践内容

(1) 体づくり運動

教師の動きをまねたり、友達と複数名で体を支え合ったりするなどの活動を通して体力向上やバランス感覚の育成をねらう。体育指導補助員は、特にバランス感覚に課題のある児童に対して、バランスのとれた状態を体感させるために個別に支援を行う。バランスがとれる範囲を体感することで、自力で試してみようとする意欲を喚起する。

(2) 水遊び

児童の実態で大きく個人差が現れやすい運動の一つが水遊びである。幼少時からスイミングスクールで泳ぎの練習をしている児童もいれば、水に顔を付けたり、水に入ったりすることが困難な児童もいる。体育指導補助員は、特に支援を要する児童につき、会話や遊びなどのコミュニケーションをとりながら水に対する抵抗感を把握していく。個人差が大きいので、個別に対応することが困難な領域である。

(3) ゲーム

物の数や数値で結果を比べることができるゲームは、低学年児童にとって「勝敗」がはっきり分かるため人気がある運動である。それだけに勝つことにこだわり、協調して運動することを忘れてしまいがちである。体育指導補助員は、時には技能的な側面から、時には道徳的な側面から児童を支援することで、協調してゲームに取り組むことで運動の楽しさを味わわせることに努めている。

4 成果

上記の実践内容は全て低学年担任と打ち合わせをして役割を指定しての実施である。補助員を学年会に出席させたことで担任の意識も高まり、より一層ねらいに即した手立てを考えるようになった。

5 課題

経験の少ない補助員の場合、上記のようなよさがある反面、打合せのための時間を確保することが難しい。通常の学年会以外に補助員との打合せのための学年会を実施しなくてはならず、教員のライフ・ワーク・バランスの点で課題が残った。

体育指導補助員の活用について（大森東小学校）

1 目的

保護者や地域住民が体育科・健康教育に関する授業を参観するとともに、児童の体力向上への意識啓発を図り、学校・家庭・地域の取組を推進する。

2 低学年体育における現状と課題

低学年では、体育授業に必要な準備や片付けなどは担任が行っている（高学年では、学級の係活動として授業の準備や片付けを児童が担うことが多い）。そのため、45分間の授業時間の確保が難しいことがある。

3 実践内容

（1）鉄棒運動（例．体づくり運動）

鉄棒に沿って横一列に並んだ児童の安全管理を複数名で行うことができる。

（2）水遊び（例．水遊び）

1年生は、小学校に入学して初めてのプールに戸惑うことが多い。複数名の大人が児童の近くにいることで安心感を与えることができるとともに安全管理の充実にもつながった。また、着替えや整列、シャワーの浴び方等、丁寧な指導が必要である。その点で、補助員が担任の行き届かない部分をフォローし、1年生が学校の水泳指導に早く慣れるように適切な声掛けを行った。

（3）ボール運動（例．ゲーム）

ドッジボールを投げる動きを個別に指導する際、複数名の大人がいることで指導が充実した。ゲームの中でも大人が複数名はいることでゲームにめりはりが出た。

4 成果

年度の当初は、並び方指導等の体育の授業を円滑に進めるための基本事項や学習規律の確認を行う際に、体育補助員がいることで担任の目が届かない部分の指導が充実した。短距離走の練習では、ラインを引くなど授業の準備や片付けを積極的に行ってもらえたおかげで、教員が児童の指導に集中することができた。また、走り終わった児童の誘導等、事前の指示だけでは足りない部分の補助をしてもらい助かった。

5 課題

当初年間予算では、低学年体育の全授業に入ることができず、年度途中で任用が終る可能性がある。再配当予算を当てにして補助員をお願いしている状況がある。

体育指導補助員の活用について（入新井第五小学校）

1 目的

低学年は、場の設定や片付けなどには、難しい部分に補助員を配置することによって、時間短縮になり、その分指導の時間を十分に確保できる。また、体育が苦手な児童に個別に指導できる時間もとれる。そのために、低学年における体育指導補助員が必要である。

2 低学年体育における現状と課題

低学年体育では遊びを通じて、体をたくさん動かし、友達と関わって心と体を鍛えることが必要である。生涯にわたって運動に親しむ児童を育てるためには、複数の指導者の技術が必要となる。運動が苦手な児童が少数いる現状があり、技能に差が多い。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使つての運動遊び

マットや跳び箱、鉄棒は危険を大変伴う運動である。指導員には、グループについてもらいマットではいろいろな転がり方を師範し、手の着き方をきちんと指導補助をした。跳び箱では、手の着き方や苦手な児童への支援をした。鉄棒では、師範し、けがなく安全な指導補助ができた。

(2) 水遊び

1年生は初めての小学校のプールなので、広さと深さに怖がり、なかなかプールに入れない児童が数名いた。体育補助員が児童に寄り添い、徐々に水に慣れさせ、最終的にはプールの横幅を歩いて横断できるようになった。

(2) ゲーム

ボールゲームでは、得意な児童が活躍して勝つためというよりは、チームの仲間と協力することに重点を置き、チームの作戦をアドバイスする様子が見られた。支援が必要なチームに付いて、トラブルになりそうな時には、関わりながらチームの作戦を再確認させるなどの視野の広い指導をした。

4 成果

指導者が複数いることで、安全確保や体を動かす時間の十分な確保ができた。児童の運動技能では、投力が上がった。遠くに投げるコツを教え、一緒にキャッチボールをする姿が見られた。3年目になるので児童の実態をよく把握しており、休み時間などは一緒に遊んだ。様々なところで手伝うなど昨年同様、多方面で活躍していた。

5 課題

週1、2回の補助では、必要な時に不在という時があった。回数を多くしていただくとさらに、低学年からの児童の体力向上が見込めたり、指導者の負担が減ったりするなどの効果が考えられる。また、昨年同様、指導者の確保も課題にあげられる。

体育指導補助員の活用について（入新井第一小学校）

1 目的

低学年の発達段階では、運動遊びに触れることで児童の誰もが「楽しい」と感じられるような指導の工夫が必要である。体育指導補助員とのチーム・ティーチングを実施し、児童が夢中になって取り組むことができる場を工夫しながら設定することで、自然に運動に親しみながら基本的な能力と意欲的に運動する態度を育てていく。

2 低学年体育における現状と課題

低学年の体力調査では、男女ともに「反復横跳び」が全国平均より低くすばやい動きが苦手な児童が多くいる。運動経験の個人差がそのまま能力差となってしまう現状がある。一人一人の実態に応じた丁寧な指導を行い、児童が「できた」を実感できる場を設定することで意欲を向上させ、楽しく体力づくりに取り組む児童を育成する必要がある。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使った運動遊び

マットや跳び箱を使った動きは、支持や回転など個人差が出やすい。そこで授業者と体育指導補助員とが安全管理を行いながら、複数の場を設定し、児童がサーキットトレーニングのように夢中に取り組めるような工夫を施した。個々の能力に応じた「できた」を味わうことできるとともに、複数名での安全確保を行いながら子どもたちが安心してチャレンジできるようになった。

(2) 水遊び

着替えが苦手な児童が数名いたので個別に授業準備支援を行った。水につかって、水をかけ合ったり、まねっこをしたり遊んだり、電車ごっこやリレー遊びなど行う際に授業者と体育指導補助員とが安全管理を行いながら、安心して、夢中に取り組めるような工夫を施した。複数名での安全確保を行いながら子どもたちが安心してチャレンジできるようになった。

4 成果

授業準備や場の設定を事前に体育指導員が行うことで、担任がじっくりと一人一人を見とることができた。また、個別指導の場面が増え、児童は自分の能力に応じて運動することへの喜びや「できた」という達成感を味わうことができた。また補助員が用具等の準備や片付け、ケガをした児童への対応を行うことで、授業時間や運動量を十分に確保できるようになった。

5 課題

体育指導補助員が教育実習に行く期間があり、都合により時間調整できないことがあった。年間を通じた体育指導補助員の確保と学年や担任教員との綿密な情報交換・打合せが課題として挙げられる。また、今後予定されている校舎改築工事に備え、現時点から限られたスペースでの指導の工夫や計画についての検討を進めていく必要がある。

体育指導補助員の活用について（山王小学校）

1 目的

低学年は、運動経験の差から、児童一人一人の動きの習得の度合いが大きく違い、一斉の活動が困難な場面がみられる。また、校庭のように場所が広いと、教師の指示の声が通りにかかったり、聞き取りにくかったりすることや教師一人では目が行き届かず、安全管理が難しいことがある。体育指導補助員の活用により、一斉の指導の中で個々への対応を行うことで、これらの課題を解決することが可能になると考える。

2 低学年体育における現状と課題

低学年体育では、特に個人差が大きいので、個別に対応する必要がある。また、用具の準備・片付けに時間がかかり運動量の確保がむずかしい場面もみられる。安全面に配慮しながら運動量を確保し、また個別に対応することが低学年体育の課題である。

3 実践内容

(1) 走・跳の運動遊び

低学年の走・跳の運動遊びは、いろいろなレーンを走ったりリズムよく跳んだりする楽しさに触れ、走ったり跳んだりするなどの基本的な動きを身に付ける必要がある。そのために、様々な場を用意することが児童の動きにつながるため、体育指導補助員には、場の準備を中心に行ってもらった。また、安全確保のため児童の動きを見守ってもらった。

(2) 水遊び

水が怖くて顔を水につけられない児童から、スイミングスクールの効果で25メートル以上泳ぐことができる児童まで実態に大きな差がみられた。

1・2年生はともに143名と人数が多かったので、泳力の低いグループを、学級担任と体育指導補助員の5人体制で実施することができた。体育指導補助員は、個別に水中で目を開けたり、もぐったり、浮いたりといった初歩的な水慣れの補助を行った。また、全体で行う宝探しやゲームの場面では準備・後片付けを適宜補助した。

4 成果

授業の準備をしてもらうことで授業時間の確保ができ、子どもたちの運動量を保障することができた。また、個別に指導していると目が行き届かなくなることもあるが、個別指導中も児童の安全管理に気を付けてもらうことができ、安心して一人一人にアドバイスをすることができた。

5 課題

継続して体育指導補助員をしてもらったので、教具の場所などの勝手も分かっているため、新学年のスタートがスムーズにいった。体育指導補助員が変わるとなると、動き方や物の管理の仕方を理解するまで時間がかかると感じた。

体育指導補助員の活用について（馬込小学校）

1 目的

- ・ 低学年児童に運動することの楽しさを味わわせ、意欲的に運動する態度を育てる。
- ・ ティーム・ティーチングで指導する利点を生かし、体育の授業の運動量や安全面の確保をする。

2 低学年体育における現状と課題

- ・ 運動や体育の授業を好む児童が多い。成育歴や児童の発達段階から、集団行動が苦手な児童もいる。スポーツテストの結果は、都の平均に至らない種目もある。
- ・ 跳び箱や鉄棒など、できる・できないがはっきりしている種目では技能面で大きな差があるので、児童の苦手意識につながらないようにすることが課題である。

3 実践内容

(1) 鉄棒を使った運動遊び

2学期に低学年は「鉄棒を使った運動遊び」に取り組んだ。児童の安全面、アドバイス、補助等、ティーム・ティーチングで指導することで、学習効果が上がった。鉄棒を怖がる児童や全体指導ではよく理解できない児童にとっては効果的だった。休み時間などに鉄棒で遊ぶ児童が増えた。

(2) なわ遊び

3学期に全校で長縄集会に取り組んでいる。この期間に集中してなわ遊びに取り組み、回転しているなわに入ることができるように指導している。この時、ティーム・ティーチングで指導することで練習の場と苦手な児童の練習の機会を増やすことができている。全校の集会では、低学年の学級も記録を伸ばすために意欲的になわに挑戦している姿がある。

(3) 水遊び

水遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、水慣れを通して不安感を取り除くことができるようよう指導している。特にもぐる遊びで、水に顔をつけることが苦手な児童に対して、スモールステップで取り組めるよう配慮している。新たな苦手意識をもたせないようにするため、個に応じた丁寧な指導ができている。

4 成果

- ・ 体育補助員と児童が良い人間関係を作り、学習効果を上げている。特に、「鉄棒を使った運動遊び」では指導者が増えることで、担任も児童も安心感が高まった。
- ・ 2年生は2年目のかかわりとなるので、初回から効率的に体育の授業をすることができた。

5 課題

- ・ 打ち合わせの時間を確保することが難しいため、その場で簡単に打ち合わせを行い、対応してもらうことが多い。

体育指導補助員の活用について（馬込第二小学校）

1 目的

児童の体力向上と児童が安全に運動するため

2 低学年体育における現状と課題

児童の実態を見ると準備や片付けなど、児童とともにできるものもあるが、準備に関しては、授業開始前に教員が行うことが多かった。また、児童の運動量を確保や安全に運動させたりするために、学年単位で体育の学習を実施することがあった。学年単位であると、用具が不足し、十分に運動できる環境であるとは言いがたい。

3 実践内容

（1）ボールけりゲーム

- ・準備運動の間に、用具の準備をしてもらう。
- ・予備運動を一緒にやってもらう。
- ・ゲームのときの安全管理をしてもらう。
- ・児童が後片付けをするときに、補助してもらう。

4 成果

児童の運動時間を補助員がいることで、多く確保することができた。また、予備運動で、児童と共に運動してもらうことで、児童の運動量が増えた。

担任だけでなく、補助員からの肯定的な言葉掛けがあり、児童の意欲につながった。安全面からも、複数の目で児童を見守ることができた。

5 課題

事前に打ち合わせをする時間が確保できなかった。

体育指導補助員の活用について（馬込第三小学校）

1 目的

- 児童が安全にすすんで楽しく運動をすることができる。
- 内容の充実を図るとともに、児童の十分な運動量を確保する。
- 様々な運動に親しみ、児童が自ら運動を楽しむ態度を育てる。
- 配慮を要する児童を支援する。

2 低学年体育における現状と課題

- ・ 入学までに経験した運動の質や量の個人の差が大きく、年齢に応じた運動技能を十分に身に付けていない児童も多い。
- ・ 1時間の学習内容の充実、展開の工夫はあるが、1時間（45分）の児童の運動量がまだ不十分なときもある。
- ・ 楽しみながら運動にすすんで取り組めるように支援する。

3 実践内容

(1) 長縄・持久走

- ・ 「元気アップタイム」を設定し、全校で運動する時間を設け、体力向上を目指した取り組みを行っている。
- ・ 年間を通して、週に1回、長縄と持久走に取り組んでいる。

(2) ボールゲーム（“おひさまベースボール”）

- ・ 投げる・捕る・走る運動ができ、中学年のベースボール型ゲームへとつながるボール遊びである。使用する用具が多いため、補助によって、準備の時間が短縮され、運動量を確保できている。また、児童の安全管理も十分にできている。

4 成果

- 授業の事前の道具の準備や場を作る時の準備、片付け等がスムーズに行えたことにより児童の運動量がさらに増えた。
- 配慮を要する児童の安全管理を十分に行うことができた。
- 運動の仕方やボールや縄の扱いを一人一人に丁寧に指導する時間を設けられた。そのため運動の仕方の理解も深まり自分でより楽しく運動に取り組めた。

5 課題

- ・ 水泳指導に参加できるかどうか。
- ・ 指導時間数の確保

体育指導補助員の活用について（梅田小学校）

1 目的

児童一人一人が楽しく体育学習や日常の運動に取り組めるように担任の指導の補助を行う。

2 低学年体育における現状と課題

小学校入学前に友達と一緒に体を動かして様々な運動を経験している児童と運動経験が少なく、運動を好まない児童の差が大きい。学校生活において、児童が安全に運動をする場や十分に楽しめる時間を保障し、夢中になって取り組むことができるような工夫が必要となる。担任や体育指導補助員と一緒に体を動かして遊んだり、よい動きを取り上げて言葉掛けをしたりすることで運動の楽しさを体験させることができる。

3 実践内容

(1) 鉄棒を使った運動遊び

場の準備や用具の片付け等、担任一人では、時間がかかり、児童も安全に素早く準備を行うことが難しい。そこで、体育指導補助員は担任と連携して場の準備を行った。事前に用具の準備をしたり、授業中も落下防止マットの修正をしたりすることで、安全に運動させることができた。鉄棒がこわいと感じる児童の補助をして、楽しく運動をさせることができた。

(2) 投の運動遊び

「ひらいて、ぱたん、とんでいけ」を合言葉に、ボールを遠くに投げる運動遊びを行った。運動の楽しさに気付かせるためにやさしい場や個の力に応じて練習する場を設けた。担任と体育指導補助員が連携を図り、児童の姿を見て、よい動きを取り上げて言葉を掛け、夢中になって運動に取り組ませることができた。

(3) 水遊び

体育指導補助員が顔を水につけることを怖がる児童に側で補助することで、水に対する不安がなくなり、水に顔を付けることができるようになった。また、浮くことの師範を見せることで、水の中でもぐる動きのイメージをもたせることができた。児童が安全に水中で運動遊びができるように担任と連携を図って指導の補助をした。安全管理もより万全になり、授業の中での助言や称賛の言葉掛けも増え、安全に低学年の水遊びができた。

4 成果

学級担任一人では見られない部分を見て、気付いたことを担任に報告したり、個別に児童に声を掛けたりして、児童と一緒に運動遊びを行うことができた。低学年の児童が友達と仲良く協力することや規則を守って運動すること、事前準備をすることで運動できる時間が増えた。

5 課題

体育指導補助員と担任との連携が必要である。補助員が担任と事前事後に話し合うことで、次の学級の授業もより効果的になると考える。

体育指導補助員の活用について（池上小学校）

1 目的

- 運動の楽しさを味わう指導を工夫するとともに、運動量も確保する。
- 友達と関わり合う場面を授業に多く取り入れ、運動することの楽しさを実感させる。

2 低学年体育における現状と課題

低学年においては、それでの経験や生活習慣の違いから、単元によって運動への関心・意欲・態度に大きな差が見られる。また、体力、技能においても差が見られ、全体での指示でスムーズに身体が動く児童、個別に対応しなければならない児童など個人差が大きい実態がある。年間の授業を通して、児童が集団行動できるようになること、きまりを守って身体を動かすことの楽しさを感じられるようにすることが課題である。

今年度は1年生が3学級、2年生が4学級編成なので、2クラス合同で校庭を使うことがある。また、各学級30人前後の児童を指導する際には、児童の実態に応じた場の設定、学習意欲、技能面に応じた支援も必要である。

3 実践内容

(1) 走・跳

担任が着替えや準備運動、学習のめあて等の指導をしている時間に補助員がラインを引いたり、必要な場所に目印のコーンを置いたりするようにした。そうすることで、児童がすぐに運動に取り組むことができ、運動量の確保に結びついた。また、タイムを測ったり、得点を記録したりすることで、担任は指導に専念することができ、個に応じた指導やめあてを達成するための助言を充実させることができた。

(2) ゲーム（ボール投げゲーム）

道具の準備の補助。ゲームを三面で行ったので、2人の大人の目で安全に指導ができた。ボールの投げ方については個別指導をしたことで、苦手意識をもつ児童が少なくなった。また指導計画がすすむにつれて、場の設定の難易度を変え、児童の学習意欲を持続、高められた。複数の場に的を準備する、ラインを引くなどの準備では、体育指導補助員の支援は多いに役立った。

(3) 跳び箱を使った運動遊び

低学年の児童にとって、マット、跳び箱を運ぶことは重く、危険を伴う。場の設定において担任一人では、児童の運動時間を確保できなくなることがある。補助員を活用することで、素早く場の設定ができ、また児童の実態に応じて、場の難易度を調節することができ、児童の関心、意欲を持続することにもつながった。

4 成果

指導の工夫や充実だけでなく、児童の安全確保にも効果的であった。また、運動に苦手意識のある児童は担任、補助員の支援を受ける機会も増え、運動に対する関心、意欲の高まりが見られた。

5 課題

打ち合わせの時間を確保しにくい、短時間でも情報交換をして効果的な支援に努める。

体育指導補助員の活用について（池上第二小学校）

1 目的

運動が苦手な児童に個別で対応しできることを広げ、自信をもたせたり、自己肯定感を高めたりする。

2 低学年体育における現状と課題

本校の体育の現状として、運動が好きでよく遊ぶ児童がいる反面、運動が苦手な児童もいる。児童へのアンケートでも、学校から帰った後、あまり外で遊ばない様子が見受けられる。

低学年でもその傾向が少しずつ現れ、休み時間も教室に残りたがる児童や外に出ても体を動かしたがる児童がいる。体づくり運動など、体を使っていろいろな動きをすることで柔軟性や敏捷性を高め、いろいろな動きに取り組めるようにしていきたい。

3 実践内容

水遊び

水に強い恐怖感を児童に付き添い、できることを支援しながら緊張感を減らしていった。徐々にリラックスして水の中にいる浮遊感を楽しみだし、潜ったり目を開けたりできるようになっていった。本校に来ていただいている体育指導補助員はスイミングスクールで教えていた経験があり、スモールステップで水慣れや水遊びの楽しさを味合わせることができた。

4 成果

集団での活動が困難な児童に付き添い、体を動かすことの楽しさを実感させることができた。そのような児童の思いに寄り添いながら場所や活動内容などを担任と相談しながら個別に対応した際に、集団の中に入り参加する姿が見られるようになった。

5 課題

本校では、集団での活動が困難な児童がいる。校庭や体育館等広い場所での学習中にその場にいることができず、クールダウンをする必要から集団を離れることがある。そのような児童に付き添うことが多く、本来やっていただきたいと考えていたことが十分できなかった。その児童も、だんだんに落ち着いてきたため、来年度は当初考えていた内容で体育指導補助員の活用を考えたい。

体育指導補助員の活用について（徳持小学校）

1 目的

- ◎体育指導員を活用することにより、低学年の体育学習の授業展開をスムーズにして充実を図る。
- ◎低学年児童にとって、体育学習が安全に展開できるようにする。
- ◎体育学習における個々の課題に応じた支援ができるようにする。

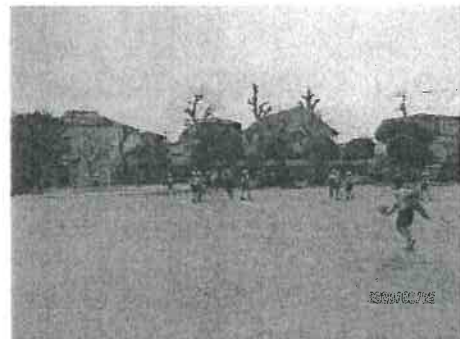
2 低学年体育における現状と課題

- 【個人差】・スポーツ少年団等の各団体に所属するなど運動を日常的にしている児童は、高度な技能がある。
 - ・運動をしていない児は、運動への関心が乏しい。
 - ・授業での教え合い・協力が機能しない。
- 【体力】・運動能力テストの結果が30年前と比較し下降している。
- 【調整力】・まっすぐ走れない。転んでも手が出ない等。
- 【人との関わり】・友達とうまく関われない。

3 実践内容

(1) ボールけりゲーム

2年生の体育学習で、体育指導補助員を活用した授業を行った。ゲーム中に審判をしたり、ドリブルの練習では、指示が理解できない児童に教えたり、うまく蹴れない児童を励ましたりした。その成果として、どの子もモチベーションを高くもち、最後まで活動することができた。また、用具の準備を補助員が担うことにより短時間でスムーズに場の転換ができ、活動時間を伸ばすことができた。



4 成果

- ◎補助員からの言葉掛けにより、児童は、より「できた喜び」を感じることができた。
- ◎授業の準備や片付けを補助員が行うことで授業がスムーズに流れ、教員は指導に集中することができ、1時間の中で児童の運動量が確保できた。

5 課題

- ・体育指導補助員と打ち合わせをする時間の確保が難しい。
- ・低学年だけでなく中・高学年でも活用できると、より一層学習の充実を図ることができる。

体育指導補助員の活用について（入新井第二小学校）

1 目的

本校の健康体育教育の重点として、小学生駅伝大会を活用した全校の持久力の向上への取組を行う。そのために、体育授業の初めに「3分間走」や「入二体操」「リズムなわとび」を取り入れたり、マラソン月間を設定したりすることによって、全児童の体力向上を目指す。

2 低学年体育における現状と課題

毎朝の「あさ遊び」や週に一度の「ふれあい活動」などの実施により、活動的な遊びを好む児童は多い。一方で、集団の中では全体の指示を受け止められない児童や運動の面で困ったことがあってもその気持ちを自分から表せない児童も複数名いる。どの児童にも「やればできる」という見通しと意欲をもたせ、基本的な運動の技能を育て、体力の向上を図るために、個に応じた指導を充実させていく必要がある。

3 実践内容

(1) 表現リズム遊び

今年度から取組を始めたリズムなわとび運動では、個別にリズムをとる練習をしたり、実際に同じ動きを目の前で見せたりすることによって、児童がリズムに乗って楽しくなわを跳び、体を持続して動かせるように指導を行った。

(2) 水遊び

水を怖がる児童に対しては、体育指導補助員が個別の指導について、水慣れから丁寧に指導、支援を行った。特に、顔をつけられない児童には顔洗いからの段階を踏んで個に応じた指導を繰り返し行った。

(3) 器械、器具を使つての運動遊び

跳び箱やマットを使つての運動遊びでは、達成感をもたせる指導を重点とした。児童にスモールステップの自分のめあてをもたせ、それを達成できるように、個別に技能のポイントを指導し、できたところを補助員に具体的に褒めてもらうようにし、技能と意欲の向上を図った。

4 成果

聞いた指示だけでは、的確な動きがしにくい児童に対して、手本や動きの助言をすることによって、児童が戸惑うことなく運動に取り組むことができやすくなった。また、持久性を要する運動や遊びの際にも児童に助言や励まし等を与える機会を増やすことができた。

5 課題

体育指導補助員と学年学級担任との綿密な打合せの時間は、確保しにくい状況であるため、個の児童の課題に応じて、積み上げていく指導や支援は十分にはできていない。

体育指導補助員の活用について（入新井第四小学校）

1 目的

教育目標「たくましく生きる子ども 元気な体をつくとともに、自分の力で課題を解決しようとする子どもを育てる」に向けて、体育・健康教育の推進に取り組んでいる。

2 低学年体育における現状と課題

- ・運動や遊びの経験が乏しい児童や発達に遅れのある児童がいる。
- ・運動や遊びが好きな児童が多い。
- ・東京都児童・生徒体力・運動能力調査において、シャトルランや反復横跳びは全国や都、区を下回っている。
- ・教員の他に、体育指導補助員や特別支援員が援助や補助を行い、安全に配慮して、活動的に取り組む必要がある。

3 実践内容

(1) 入四マラソン（例. 体づくり運動）

2月のマラソン記録会に向けて、児童が能力に応じた目標をもって取り組むことができるように働きかけたり、支援したりしている。また、一斉指導で話を聞くことが難しい児童や個別な指導が必要な児童に対して支援を行うとともに、体育補助員も自ら児童と一緒に活動している。

4 成果

- ・教員と体育補助員がチーム・ティーチングで授業に取り組むことによって、一人一人に丁寧にかかわることができた。それにより、子どもたちがめあてをもって取り組み、できる楽しさやわかる喜びを感じることができる経験を増やすことができた。
- ・教員と体育補助員がチーム・ティーチングで授業に取り組むことにより、安全で活動的に行うことができた。

5 課題

- ・専門性の高い体育補助員の年間を通しての確保

体育指導補助員の活用について（東調布第一小学校）

1 目的

体育指導補助員の配置によって、きめ細かい指導を行う。

2 低学年体育における現状と課題

学級内には、運動の得意な児童もそうでない児童もいる。運動が得意な児童は、毎時間意欲的かつ積極的に体を動かす姿が見られる。そうでない児童にとって体育の授業中は運動のこつが分からずに進んで体を動かせなかったり、領域によっては恐怖心が前面に出てしまったりすることでさらに運動から遠ざかってしまう児童も少なくない。児童一人一人の特性、能力に合った指導・助言ができれば、少しずつ苦手意識もなくなってくるのではないかと考える。

3 実践内容

(1) 体づくり運動

体育館において、様々な用具（ボールや段ボール、フラフープなど）を活用して児童同士の声掛けを促しながら体を動かせるようにする。低学年であるため、場の設定や用具の準備を児童だけでは難しいので、担任と補助員とで児童の安全を確認しながら進めることができた。2人の指導者がより少人数の児童に指導・助言できるので児童の様々な動きの工夫を見とれた。楽しみながら体を動かすことができたので、児童の運動に対する意欲の向上につながった。

(2) ボール投げ遊び

2人組でのボールのキャッチボールや2つのボールを使った転がしキャッチボールなど児童が楽しみながらできる運動を多く取り入れた。低学年という発達段階を考えると、自信をもって運動をするためには、教師による見本や、具体的なこつを伝えることも大師である。このような場合でも、補助員がいることで児童にその運動の様子を見せることができ、スムーズに運動に取り掛かることができた。的や用具など場の設定の準備にかかる時間も軽減できた。

4 成果

低学年の体育の学習で意識していることの一つに安全の確保がある。正しく用具を使うことも安全に楽しく運動を行うことにつながる。補助員の配置により、1人多い大人目で児童の安全を確認することができるのは大変意味のあることだと思う。また、授業前の場の設定や用具の準備でも、補助員の力を借りると準備運動と並行してできる時間も多く、運動量の確保にもつながっている。

5 課題

実際には、1日ほんの数コマの低学年体育の時間に合わせてきていただく補助員の確保が難しく、時間割を工夫することが困難であった。

体育指導補助員の活用について（田園調布小学校）

1 目的

低学年児童に運動することの楽しさを味わわせ、意欲的に運動する態度を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

低学年は、運動経験の差から、児童一人一人の動きの習得の度合いが大きく違い、一斉の活動が困難な場面がみられる。また、校庭のように場所が広いと、教師の指示の声を通りにくかったり、聞き取りにくかったりすることや教師一人では行き届かず、安全管理が難しいことがある。体育指導補助員の活用により、一斉の指導の中で個々への対応を行うことで、これらの課題を解決することが可能になると考える。

3 実践内容

(1) 多様な動きをつくる運動遊び

力試しの運動、用具を操作する運動など様々な動きを経験させるために、多様な運動の場を設定した。体育指導補助員が場の設定を行ったり、運動の場で支援をしたりすることによって、児童が意欲をもって運動に取り組むことができた。

(2) 鬼遊び（しっぽとり鬼）

体育指導補助員がいることにより、同時に2コートでゲームを行うことができ、十分な運動量を確保することができた。

(3) 水遊び

水を怖がる児童について、体育指導補助員が個別に指導を行うことにより、徐々に水に慣れることができ、成果を上げた。また、授業前のプールの水位調整や用具の準備などを体育指導補助員が行うことにより、担任が児童の指導に専念することができた。

(4) マットを使った運動遊び

体育指導補助員が動きの師範をしたり、様々な動きができる場を用意したりするようにした。児童は、自分ができる動きの場を選び、徐々に難しい場に挑戦するようになり、楽しみながら取り組むことができた。

4 成果

体育指導補助員が用具の準備を行ったり、運動の場を増やしたりすることによって、児童の運動時間が増え、十分な運動量を確保することができた。また、個に応じた指導を充実させることができ、運動に対する意欲や技能の向上を図ることができた。

5 課題

体育指導補助員の任用時間数が限られているため、補助員が担当できない時間がある。また、打ち合わせの時間を確保することが難しいことが課題である。

体育指導補助員の活用について（調布大塚小学校）

1 目的

用具やコート等の準備、体育倉庫の整備等を補助員が行うことにより教員の指導の効率化を図り、体育授業の充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

- ・全体的に投げる力、俊敏性が低い。平坦な場所でも、走って転ぶ児童もいる。
- ・低学年児童は用具の持ち運びが難しく、担任が準備、補助を行うことが多い。
- ・領域によって、児童が今もっている力を生かしながら、体育の楽しさを味わわせ、基礎・基本を確実に習得させる授業や日常生活での実践が十分にできていない。

3 実践内容

(1) 体づくり運動

授業の始めに、全校でサーキットトレーニングを行い、主となる運動に応じて変化させている。準備・後片付け、場づくりは時間がかかるが、年間を通して実施することができた。特に1年生ではみんなで関わり合う活動への支援が効果的に行われた。

(2) とびばこ遊び（機械・器具を使つての運動遊び）

補助員がいたことで、跳び箱を短時間に安全に準備・後片付けができた。場を多く用意することで、運動量を確保できた。安全面の配慮とともに、賞賛や指導事項の確認などの言葉掛けができた。児童は自分の動きのよさ、向上が分かり、意欲的学習に取り組むとともに技能の高まりも見られた。

(3) ボールけりゲーム（ゲーム）

運動量の確保のため、できるだけ多くのコートを作った。補助員が予めラインを引き、コートを作ったので、準備時間が少なくて済み、ゲームに時間を費やすことができた。サッカーに詳しい補助員だったので、ボールの蹴り方をはじめ、体の使い方、動き方を教えてもらうことができて、児童の技能も高まった。

4 成果

- 準備時間の短縮により教員が指導に集中できるとともに、運動量の確保ができた。
- 安全面の配慮が高まった。
- 児童が指導を受ける機会が増え、体育授業における学習活動が意欲的になった。
- 場の工夫を行う等、教員の授業における指導の工夫が多く観られるようになった。

5 課題

- 年間指導計画、単元計画、授業構成等を事前に支援員に十分理解させる工夫をしていくとよりよい指導、支援、補助ができると考える。

体育指導補助員の活用について（東調布第三小学校）

1 目的

本校の研究主題「自らの課題を見付け、わかる・できる楽しさや喜びを感じられる児童の育成」を目指して体育の改善を図ることが目的の一つである。体育指導補助員の活用を通して、担任では目が行き届きにくい部分への配慮児童への対応、授業準備を充実させることがねらいである。

2 低学年体育における現状と課題

本校は、注意欠陥や自閉傾向がある児童や運動が苦手な児童が在籍し、担任以外の支援も必要なことが現状である。より多くの指導者で見ることによって多面的な児童理解や安全管理をしながら、運動能力や体力の向上を図ることが課題である。

3 実践内容

(1) 体づくりの運動遊び（多様な動きをつくる運動遊び）

体育指導補助員により、配慮を要する児童を中心に支援し、用具の準備や後片付けを行うなどの支援をしていく中で、体のバランスをとる運動遊び、体を移動する運動遊び、用具を操作する運動遊び、力試しの運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、体を動かす心地よさを味わったり、基本的な動きを身に付けたりすることができ、授業を充実させることができた。

(2) 水遊び

浮く・泳ぐ運動では、担任が全体指導をしていく中で、配慮を要する児童について、個別指導をしたり、児童同士が安全に水遊びをできるようにしたり、安全管理を行った。おかげで、子どもたちは、安全に水遊びを楽しく行うことができた。

4 成果

【配慮を要する児童への対応】

配慮を要する児童に対しての対応ができ、その成果が表れ、担任は全体指導に集中することができ、授業のねらいが達成し易く、楽しさを味わわせることができた。

【安全管理】

体育指導補助員が用具の準備や後片付け等も補助をすることができた。また危険個所がないように安全管理をすることができた。準備が円滑になり、児童へ指導する時間が拡充した。

5 課題

- ・天候が不明瞭のときの体育指導補助員への連絡方法
- ・担任との打ち合わせ時間の確保

体育指導補助員の活用について（嶺町小学校）

1 目的

体力テストでは、「ソフトボール投げ」「反復横跳び」等の道具を使った分野やリズムよく体を動かす分野の結果に課題があった。この結果から、「跳び箱」「マット」等、道具を使う活動や体づくりに関する運動を充実させることを目指して、体育指導補助員を活用する。また、低学年の担任には、若手教員が多いため、安全確保にも役立てたい。指導技術の優れた体育指導指導員と、指導方法についても相談の機会をもつ。

2 低学年体育における現状と課題

道具を使った活動で、児童一人一人の活動を見取り、それぞれに支援をすることが難しい。児童の活動を担任が把握していない場合もある。また、一人一人の力を伸ばすための指導力も未熟な教員が多い。

3 実践内容

(1) 跳び箱遊び

跳び箱遊びでは、児童が自分の合った場で楽しく運動できることを目指した。苦手な児童や不安を覚える児童も多いので、担任が個別指導に当たる間、体育指導補助員が全体の安全を確保することに努めた。また、児童による安全確認が不十分な時には、それを補助した。多くの器具を使う跳び箱遊びでは、準備や片付けの際の安全確保にも、大変有効であった。

(2) マット遊び

マット遊びでは、児童が自分の合った動きで楽しく運動できることを目指した。児童によってできる運動とできない運動とがある。苦手な児童や不安を覚える児童も多いので、担任が個別指導に当たる間、補助員が全体の安全を確保することに努めた。また、個別のメニューによる補助など、取り出して支援することもできた。児童による安全確認が不十分な時には、それを補助した。

4 成果

体育指導補助員がいることで、児童一人一人により多くの活動時間を与えることができた。また、安全確保もできた。教員免許をもつベテランの人材を活用できたため、若手教員が指導についてのアドバイスを受けることもできた。

5 課題

担任と体育指導補助員との打ち合わせの時間を確保することが難しかった。打合せの時間をあらかじめ決め、短い時間でも相談できれば更なる成果が出ると考える。

体育指導補助員の活用について（千鳥小学校）

1 目的

体育指導補助員と学級担任とのチームティーチングを行い、低学年児童の体育への関心や意欲を高め、基礎的な体力の向上を図りながら運動に親しむ資質と能力を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

第1学年は、多様な運動経験が十分とは言えず、苦手としている傾向がある。外遊びをする児童は、ほぼ毎日遊んでいる一方で、室内遊びを好む児童もいる。第1学年から多様な運動を経験させ、楽しく運動する経験を積み重ねる必要である。体育に対する自己肯定感を高め、積極的に活動できる児童を育成していきたい。第1及び第2学年ともに体育は好きな教科に挙げている。授業の中で、友達や教師と関わりながら互いに学び合う気持ちを育成し、日常での運動に繋げていく。授業では、2～3名程度の小グループでの運動に取り組む活動を取り入る。ペアまたはグループの相手の運動のよさに気付いたり、協力して運動する楽しさを感じたりできるようにする。その中で自ら主体的に取り組む力を高め、主体的・対話的で深い学びのできる児童の育成に努めていく。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使つての運動遊び

第1学年のマットを使った運動遊びでは、様々な場を想定した運動遊びを行った。マットを使った運動遊びでは、いろいろな方向に転がり、手で支えて体の保持や回転をする補助をした。体育指導補助員とのチームティーチング指導により、マットの準備や後片付け等の補助に入ることで、1単位時間での運動量が増え、基礎体力の向上にも効果的な取組ができた。

(2) 体づくりの運動遊び

第2学年の体づくりの運動遊びでは、児童にとって身近な運動遊びを行った。多様な動きをつくる運動遊びでは、身体を支える動きや用具を操作したりする動きについて適切な補助をすることができた。補助員がいっしょに取り組むことで、運動を比較的苦手としている児童も、安心して、スムーズに活動を行うことができた。

4 成果

体育指導補助員が加わることで児童の実態や課題に応じた指導がより充実し、体育的活動への関心や意欲が高まった。また、事前の準備への協力を得たことで、運動する時間が確保され、個々の児童に対する課題解決の時間が増え、体力向上に繋がった。

5 課題

指導補助員の勤務時間と体育の指導の時間の調整が難しく、年間を通して計画的な指導補助員の運用が困難な時期があった。また、効果的な補助の仕方についても話し合う時間が必要である。

体育指導補助員の活用について（松仙小学校）

1 目的

基本的な体づくりや安全に活動するための手本の例示や、運動遊びやゲームの活動時間を十分に確保するための準備の補助として活用する。

2 低学年体育における現状と課題

動物の動きなど自分の体を手で支える動きをしたり、鉄棒にぶら下がったりする経験があまりないまま就学してきた児童が少なくないのが現状に挙げられる。さらに、個別に指導が必要な児童が多くいる（特に低学年）のが実態として挙げられる。そのため、基本的な「掴む」「支える」などといった動きが分からず、怪我に繋がることもある。そんな中、担任一人で体育の授業としての遊びの中で基本的な動作を教え、3年生以上の運動に繋げるためには、活動時間の確保と、その内容の充実が必要だと思われる。そして安全に活動できるための場を設定することや正しい手本が必須であるが、準備に多くの時間をとられることや、正しい手本を見せながらの指導が難しいことが課題である。

3 実践内容

(1) マット遊び・とび箱遊び

体育指導補助員は、体育倉庫からの道具の出し入れをした。また、児童が準備している間に見守った。体育指導補助員が、手の着き方や踏み切り方などを師範したことで、児童もイメージしやすくなった。

(2) ボール投げゲーム

ライン引き、ボール、的の準備など、準備する用具が多くある。体育指導補助員には、児童の準備運動の間にライン引きを終え、ボールや的の準備を済ませてもらった。ボール投げを始める前に、投げ方や体の向きを実際にやってもらい、児童に分かりやすく担任が説明をした。また、児童がボールを投げる際は、個別に指導補助をしてもらった。

4 成果

担任一人でいるときよりも、安全面での配慮がしやすくなった。また、担任が児童と準備体操をしている間に、用具の準備やライン引きなどをしてもらえるため、活動する時間が格段に増えた。また、体育指導員に手本を見せてもらったので、児童は運動のコツをイメージしやすくなった。

5 課題

本校では、担任が全教科の指導をしているため、体育指導補助員と打ち合わせする時間の確保ができなかったことが課題である。

体育指導補助員の活用について（池雪小学校）

1 目的

小学校第1・2学年における体育科の授業の改善・充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

男女ともに、都平均と比較して20mシャトルランや50m走のTスコアが低い。大規模校のため、体育活動場所も少なく、人数も多いため運動量確保に苦慮している。

3 実践内容

(1) 体づくり運動

冬季に短縄期間、持久走期間を設け、集会や授業の導入次に統一したカードを用いて実施した。体育指導補助員は、一緒に行ったり、見本を見せたり、検定を補助した。

(2) マット・跳び箱を使っての運動遊び

ショートマットを数多く設置し、繰り返しの指導を増やし運動量を確保した。体育指導補助員は、一緒に行ったり、見本を見せたり、検定を補助した。

(3) ボールけりゲーム

グループ分けを細かくして、小さいスペースの中で、多くボールに触れる機会を設定し運動量を確保した。体育指導補助員は、一緒に行ったり、見本を見せたり、検定を補助した。

4 成果

体育指導補助員を活用できたことで、授業準備をスムーズに行うことができ、教員が授業の導入を丁寧に行うことができた。

さらに目が隅々まで行き届くようになり、児童の技能の実態に応じて、細やかな補助や見守りをすることができた。

5 課題

人材を確保するのが難しい。大規模校のため時間割の調整が難しく、年度当初から計画的に任用するのが難しい。今年度は、すべて大学生を任用したが、経験がなく、慣れるまでに時間がかかった。

体育指導補助員の活用について（小池小学校）

1 目的

低学年の児童に運動することの楽しさを味わわせ、意欲的に運動する態度を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

月齢が異なる1年生では、発達段階で大きな差がある。そのため、体を動かす能力にも差がみられる。2年生では、1年生で学習してきた運動経験が生かされ、少しずつ差が減ってくる。しかし、鉄棒や跳び箱などの種目では、個人によって大きな差があり、個に応じた丁寧な指導を行っていくことが課題である。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使った運動

鉄棒をする際には、鉄棒の下にマットを敷き、動きのコツや声掛けを担当と共にを行った。2人体制で指導することで、苦手な児童の恐怖心を軽減し、児童の安全面に配慮できた。また、補助やアドバイスをきめ細かく行うことで、児童の意欲向上につながった。

(2) 水遊び

1年生では、屋外にある大きなプールに抵抗がある児童の姿が見られたが、補助員が支援をすることにより、徐々に水に慣れていく様子だった。中心になる指導教員の指示水中で聞き取りにくい場合は、補助員が指示を伝えることで、児童が安心、安全に水遊びを楽しむことができた。

(3) ゲーム

ボール蹴りゲームを行うときに、担任一人で場を設定すると児童の運動時間が減ってしまう。体育指導補助員と連携して場を設定すると時間が短縮し、児童の運動時間を増やすことができた。ボール蹴りが大好きな児童が多いが、ボールの蹴り方については個別指導が欠かせない。担任と体育指導補助員の2人体制で授業を行うことで、手厚く指導できた。

4 成果

指導者が増えることで、安全面を強化できた。また、場の設定を効率よく行え、児童の運動時間を増やすことにつながった。運動技能の差に応じて、きめ細かく支援ができ、児童の意欲向上につながった。

5 課題

事前の打ち合わせの時間確保が難しいときがあった。今後は、より計画的に進め、効果的に補助員を活用できるようにし、さらに児童の意欲の向上につなげていく。

体育指導補助員の活用について（雪谷小学校）

1 目的

低学年の授業において体育指導補助員を活用し、幼児期の運動遊びとの接続を図りながら、運動に親しむ資質と能力の基礎を育む。

2 低学年体育における現状と課題

低学年体育においては、幼児期の運動遊びとの継続で、運動の基礎となる内容を扱う。体を動かすことが好きな児童は比較的多いが、学校全体を通して、体力向上が大きな課題の一つである。児童の興味・関心をさらに高め、自分の体を自分で作っていくことの大切さを学ばせたい。

3 実践内容

（1）体づくり運動

固定遊具を利用した運動などについては、校庭の鉄棒や登り棒、ジャングルジムなど、広範囲に広がっている。学年体育を行ったり補助員の活用を図ったりすることで指導者の人数を意図的に増やし、多数の固定遊具を利用できる体制をつくる。

（2）水遊び

水遊びは水泳学習の入門期として、水に慣れる、プールでのきまりを徹底する大切な時期である。補助員を配置することで、水を怖がる児童の抵抗感を払拭できるように個別指導を担当させる。また、プールサイドでの行動の仕方や入水時のきまりの徹底など、安全管理の面でも指導をさせる。

（3）ゲーム

児童が安全に、きまりを守って友達と楽しく運動ができるように、補助員を配置し、指導を充実する。ゲーム中は審判を担当、観戦している児童への指導を補助員と役割を分担し、学級全体に指導がいきわたるようにする。また、ボール準備やゲームコートの作成など、事前の準備、片付けも補助員を中心に実施するようにする。

4 成果

年間を通して、体育指導補助員を1、2年生の学習で配置を行った。運動や体づくりの基礎、入門期として、体育学習を丁寧に実施し、個に応じた指導を大切にすることで、低学年児童の運動に親しむ資質と能力の基礎を育むことができた。また、安全面を最大限に配慮することで、児童が安全に大きな怪我もなく体育学習を実施することができた。昨年度と同じ補助員を任用できたので、活動が円滑に進んだ。

5 課題

体育指導補助員として、年度当初から、教員免許をもった地域の方を補助員として配置することができた。しかし、体育指導補助員の授業のかかわり方については、学年と補助員との連携にはやや課題がある。今後、児童のよりよい体育学習のために、役割分担などを含めた連携を強化していきたい。

体育指導補助員の活用について（洗足池小学校）

1 目的

- ・ 低学年の体育科の授業において楽しく安全に運動に取り組ませ、運動感覚を高めたり、基礎的な運動技能を向上させたりする。
- ・ 児童の運動することへの関心意欲を高めるとともに健康の増進を図るよう、体育の授業の改善・充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

低学年は運動したりゲームを楽しんだりする体育が好きな児童が多いが、高学年になるに従って、運動する機会、運動量や興味・関心の差が大きくなる。そのため、低学年のうちにきめ細かに指導することによって、「運動することが楽しい」と実感させたい。配慮の必要な児童も多く、安全に配慮して体育科の授業を行うことも必要である。

3 実践内容

(1) 走・跳の運動遊び

本校では、年間を通じて休み時間に「持久走タイム」「長なわタイム」を継続している。体育の授業でもその練習を取り入れ、児童の意欲を高め、協力し励まし合うことや、記録が伸びることによる楽しさを味わわせてきた。体育指導補助員が児童の様子や成長に気付き補助できたことは、個々の意欲や技能を高めることにつながった。

(2) 体づくり運動

体を動かす楽しさや心地よさを味わわせるには、いろいろな動きを工夫したり、器具を使ったりする必要がある。体育指導補助員が入ることにより、担任だけでは気付かないことに気付き、児童の安全が確保された。また、体を動かすことが苦手な児童や動き方などを理解することが困難な児童の補佐に入ることができた。

(3) ゲーム遊び

ボールゲームなどのゲームは大好きだが、ルールを理解することが難しい児童がいたり、勝ち負けにこだわってトラブルになったりしがちである。本校では、特に、ボール投げゲームやボールけりゲーム、いろいろな鬼遊びの際に体育指導補助員を活用し、安全に、十分な運動ができるように配慮することができた。

4 成果

- ・ 安全面での配慮や支援により、児童は安心して運動に取り組むことができた。
- ・ 体育指導補助員が進んで運動を行ったり、休み時間に児童と一緒に遊んだりすることで、児童は楽しく運動に親しむことができた。
- ・ 地域で開催された「洗足池マラソン」でも、低学年の児童の参加が多く、よい成績を上げた児童も増えた。

5 課題

- ・ 体育指導補助員は大変有効で、学校にとってとても役に立つ施策で感謝している。しかし、週に4時間だけ定期的に来校していただける人材を探すのはとても困難であった。今年度は、生活指導支援員として紹介していただいた体育科で学ぶ大学生にお願いしたため、子どもたちとともに活動することができ大変良かったが、木、金曜日の2日間の4時間目からしか入ることができなかったことがとても残念である。学生等、体育指導補助員ができる人材を紹介していただけるシステムがあるとよいと思う。

体育指導補助員の活用について（赤松小学校）

1 目的

低学年児童の体力向上のため、体育の授業の円滑な展開と児童への支援を行う。

2 低学年体育における現状と課題

1・2年生が教員の指示で体を動かす際に、担任一人で学級児童30名程度を指導するには限界がある。特に低学年児童は、自己中心的な行動をとったり、指示通りに運動できなかつたりするため、全体指導の中では担任が支援できない場面もあり、個に応じた指導の充実と安全管理の徹底が必要である。また、配慮を要する児童がいる場合、一斉指導の場面では、担任以外の指導者が必要である。

3 実践内容

(1) 水泳指導

担任以外に体育指導補助員が付くことで、プール内で児童にかかわることができる指導者が増え、より安全で細やかな対応をすることができた。低学年では水を怖がる児童もいるが、その児童に補助員が付き添うことで、徐々に抵抗なく取り組めるようになった。

(2) ボールゲーム

補助員がボールの投げ方の見本を示し、二人組でボールを投げ合う練習をした。その後のボールゲームでは、担任と分担して児童の指導にあたった。そのことによりコート数が増え、少ない人数でゲームができるため、児童の運動量が増えた。また、担任と補助員がそれぞれに児童の指導を行うことができ、児童一人一人への声掛けの回数が増え、児童の見取りも十分にできた。

(3) 大縄跳び・持久走

大縄跳びの際に、担任と補助員でクラスを2分して縄を回すことができるので、児童が縄を跳ぶ回数も増え、運動量を確保できた。また、補助員が適切な声掛けを行って跳ぶタイミングを児童に示すことで、跳ぶことができるようになる児童もいた。持久走では、児童の記録を取る際に補助員がタイムを読み、担任が記録すると大変スムーズであった。

(4) マット運動・跳び箱運動

場の設定を増やし、複数体制で練習させることができ、児童の運動量が増えた。また、マットや跳び箱を使った運動では、安全確保が大切であるが、この点においても複数の目があることはよかった。

4 成果

複数体制で指導を実施することで、指導の工夫、安全管理の徹底が増し、個に応じた指導が充実した。安全管理にも効果的だった。また、授業準備や片付けを補助員にお願いすることで、担任は児童一人一人と丁寧にかかわりながら授業を行うことができた。

5 課題

本校では、ここ2ヶ年の間、補助員が1名となっている。人員の確保は毎年の課題となっている。区から出される講師名簿を利用したり、地域の人材を積極的に活用したりする必要がある。

体育指導補助員の活用について（糎谷小学校）

1 目的

体育の授業の充実・体力向上を図る。

2 低学年体育における現状と課題

今年度、本校は10月より校庭改修があり、活動場所が限られて児童が思いっきり運動できるスペースがなかったり、活動場所の移動で時間を取られたりと環境面が充実できなかった。そのような状況のなか、さらに大きな用具やたくさんの用具を自分たちで出したりしまったりすることができず、準備や片付けを教員と一緒にすることが多い。また、授業の中では、ポイントの見つけ方、友達へのアドバイスの仕方、審判の仕方など、スモールステップを踏んで学ぶ段階にあり、できているか教員が確認し指導する必要がある。個別指導が有効な児童も多い。

3 実践内容

(1) ボール投げゲーム

試合をするとき、複数のコートにそれぞれ教員がついてアドバイスした。試合の仕方、審判の仕方、ルールの確認なども、試合進行と並行して教えることができた。いい動きをその場で見逃さずに称賛し、個別に指導した。

(2) 跳び箱遊び

たくさんの、大きな重い用具を使用した。教員が2人いることで、安全な運び方を指導しながら、スムーズに準備と片付けをすることができた。また、授業の中では、課題別に練習場所を変え、細やかに個別指導することができた。

(3) 体づくり運動

長縄を使った運動のときに、縄を回す教員が2人いることで、児童に声を掛けながら、跳ぶことができた。また、フラフープを使ったり、縄を使ったり、ボールを使ったりといろいろな場を設けて体づくり運動をすることができた。

4 成果

体育指導補助員がいたため、体育の授業を充実させることができた。特に跳び箱遊びでは、跳べない児童への指導は、体育指導補助員が担当し、補助付きで跳べるようになった児童が増えた。担任は跳べる児童の指導に専念することができ、とても効果的だった。また、準備片付け、体育指導補助員がいることで安全に行うことができた。また、どの領域でも、児童への支援、指導の掛けが、児童の体力向上に効果があった。

5 課題

1、2年生で7クラスあるが、体育指導補助員が付く時間が週に4時間なので、2週間に1時間の配置がある。週に1時間ずつでもクラスに体育指導補助員が付くと、体育の授業をもっと充実させることができる。また、体育指導補助員と打ち合わせをする時間をもつことができなかつたので、その時間も取れると更に計画的に指導ができると考える。

体育指導補助員の活用について（東糀谷小学校）

1 目的

児童の運動能力や体力差に応じた支援を行うことで、運動量を十分確保しながら運動好きな児童を育成し、児童全体の体力向上を図っていく。

2 低学年体育における現状と課題

1年生は、体を動かすという生活経験の差からくる個人差が大きい。休み時間や放課後、外で遊ぶ経験が少ない児童は柔軟な動きが苦手で、未経験の運動に対しての習得がなかなかスムーズにいかないことが多い。2年生になると体育の時間の学習が功を奏し、個人差は徐々に改善されてくるものの、担任一人では個に応じた支援が行き届かず、運動能力の高い児童に十分な運動量を確保することが難しい状況である。体育指導補助員を活用して個に応じた支援を行い、運動能力の高い児童にも満足いく運動量を確保して、運動への興味、関心を持続させていくことが課題である。

3 実践内容

(1) 体づくりの運動

全児童に体を動かす心地よさを味わわせたいが、一斉指導では何をしてよいのかわからず、戸惑い、運動に消極的になる児童もいる。また、運動への苦手意識が克服できず運動嫌いになりがちな児童もいる。このような児童に対し体育指導補助員を活用することにより、担任が全体指導を行っている際、個に応じた支援が必要な児童に声を掛けて励ましたり、実際に隣について一緒に運動をしたりすることで児童を安心させることができた。児童は体育指導補助員の支援を受けながら、からだを動かすことで心地よさを味わえるようになった。

(2) 水遊び

1年生では、指導開始当初、顔を水中につけることができない児童が約半数程度いた。また、特に危険を伴うプールでの指導にもかかわらず、安全上の約束を守らせることにも課題があった。しかし、回を重ねるにつれ、児童と体育指導補助員との良好な人間関係が築かれたことにより、児童が落ち着いて行動することができるようになってきた。また、個に応じた支援が必要な児童に、少しずつ水に慣れるよう個別に指導をすることで、担任も全体指導に集中して取り組むことができ、児童の運動量を確保できるようになった。

(3) ボール投げ

1年生では、ボールを投げる経験の少ない児童を中心に、体の使い方がわかっていない児童が多く見受けられた。体育指導補助員による個別指導などを通して、自然な体の使い方を身に付けさせることができた。2年生では、好き嫌いに個人差が大きいドッジボール遊びであったが、体育補助指導員による準備や安全管理により、担任が安心して指導できるようになったことで児童への励ましの言葉掛けが功を奏し、ボール遊びを楽しいと感じる児童の割合が増えてきた。

4 成果

上記(1)～(3)のように体育補助指導員を活用することで運動好きな児童が増え、運動量を確保できるようになった。

5 課題

上記の成果を基に運動好きな児童を増やし、継続的に体力向上を図っていく。

体育指導補助員の活用について（北糞谷小学校）

1 目的

- (1) 体育学習において児童一人一人の個別の課題に応じて支援ができるようにする。
- (2) 低学年児童に運動する楽しさを味わわせるとともに運動に対する意欲を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

- (1) 東京都運動能力調査では、男女とも東京都平均よりも合計得点が高い。
- (2) 男女とも持久力が低い傾向にある。
- (3) 準備の時間に待つことができずに、トラブルを起こす児童もいる。担任が全体指導に集中できないことがある。

3 実践内容

(1) 「体づくりの運動遊び」

「大縄跳び」が3年生より「8の字跳び」になるための練習をした。担任グループと補助員グループに分かれて練習したことにより練習量・運動量ともに確保することができた。

(2) 「器械・器具を使つての運動遊び」

「マットあそび」「とびばこあそび」において、児童とともに準備をする際に安全面を十分配慮して行うことができた。器械・器具を使つての運動は個々の恐怖心や技能の差が大きい。2人体制で行うことで行き届いた指導をすることができた。

(3) 「ゲーム」

「ボールなげゲーム」において場の設営補助をすることでスムーズに授業が展開できた。また、ゲーム中に運動が苦手な児童に対して指導・助言をしたためゲームに楽しく参加することができた。

(4) 「水遊び」

水に対して恐怖心のある児童に個別に対応することにより不安が軽減し、スムーズに入水させることができた。個別の指導では泳力が高いコースを担当し、クロールの息継ぎなどをアドバイスし、技能を向上させた。

4 成果

- (1) 体育指導補助員がいることにより、児童の安全確保と同時に用具の準備・片付けにかかる時間が軽減されたため運動量も確保できた。
- (2) 体育指導補助員が、配慮を要する児童に対して、個別にルールややり方などを教えてくれるので、児童の満足度も増し、意欲的に学習に取り組むことができた。
- (3) 休み時間も鉄ぼうや縄跳びなどの遊びの支援をすることにより、技能を向上させることができた。

5 課題

学習内容を事前に連絡することにより、指導方法について共有していく。

体育指導補助員の活用について（羽田小学校）

1 目的

- ・児童の運動に対する関心・意欲・態度の向上
- ・児童の運動能力の向上。

2 低学年体育における現状と課題

本校の低学年児童は、運動好きな児童が多く、休み時間には全員が外遊びに出かけているが、学校外で体を動かせる場所や習い事が少ないため、運動能力的は低い。今年度も「東京都統一新体力テスト」の結果として、①シャトルラン②ソフトボール投げ③長座体前屈の3つが全国平均を大きく下回っている。そのため、本校では、以下の実践を通して児童の運動能力の向上を図った。

3 実践内容

(1) 走の運動遊び（走力向上）

鬼ごっこやかけっこなどの内容に加えて、低学年から「校内マラソン大会」に向けて毎時間の授業の導入で800m走に取り組んだ。また、全校の取り組みとして「マラソン月間」を設定し、1か月間、中休みに全児童が5分間走に取り組んだり、毎週1回、朝にマラソンタイムを新設したりした。体育指導補助員には、一緒に楽しみながら走ったり、走り方の細かい指導をしてもらったりした。初めのうちは「走りきることを」目標にしていた児童も、2学期末には「同じペースで走り続けること」と「タイムを更新すること」を意識して取り組むことができるようになった。また、体育館体育の授業の導入でシャトルランに取り組んだ学級は、児童の折り返し回数の上昇が見られた。

(2) ストラックアウト（投力向上）

投げる能力の向上のために、低学年段階から、体育補助員とも連携して、「左足を軸にする」「投げたい方向を見る」「斜め上に投げる」等のポイントを明確に示し、繰り返し指導した。また、楽しみながら取り組めるように校庭にストラックアウトを設置し、いつでも投げる運動に取り組めるようにしたところ、投げる運動に対する慣れが見られるようになった。

4 成果

体力の向上を目指して導入をルーティン化することにより「運動量の確保」と「苦手意識の克服」が達成できた。また、新しい取り組みにより、運動に慣れながら楽しく体力向上を目指せるようになった。

体育補助員とも連携して、低学年のうちに運動のポイントを理解させ、全児童に一貫した指導をしたことで、中学年以降も統一した指導や同じスタートラインから始めることが可能になった。

5 課題

低学年児童には大きな向上が見られたが、高学年児童には未だ課題が見られる。

今後は、低学年で指導されたことを伸ばしていけるために、体育指導補助員の指導を基にした年間を通した授業内での手だてを考えていく必要がある。

体育指導補助員の活用について（都南小学校）

1 目的

- 低学年の児童に運動することの楽しさ味わわせ、意欲的に運動する態度を育てる。
- 低学年の児童にとって体育が安全に展開できるようにする。
- 体育指導補助員を活用することで低学年の体育学習がスムーズに展開できるようにする。

2 低学年体育における現状と課題

基本的には外遊びや体を動かすことが好きな児童が多い。ただ地域の公園などの環境を見ても、規則としてボール遊び等ができず、運動内容が乏しくなる現実がある。低学年のうちから基本的な体育指導に触れ、運動能力の向上を図る必要がある。

3 実践内容

(1) 水遊び

水の中での動きは、まずは水に顔をつけることが怖い、水の中の呼吸法を知らない児童が多いので、体育指導補助員を活用して、水を怖がる児童に個別に対応することでだんだんと水に慣れる、呼吸法を徹底して指導することが重要であるので、体育指導員による個に応じた指導を行うことで、児童が意欲をもって水遊びを楽しめるようになった。また体育指導補助員が付くことでプール内の児童に関わる指導者の数が増え、プール内の安全が確保できた。

(2) マットを使った運動遊び・跳び箱を使った運動遊び

低学年にとって、マットや跳び箱を運ぶことは重く、危険を伴う。場を設定するときに担任一人では、時間がかかり活動時間が短くなってしまう。そこで、体育指導補助員を活用して場の設定を行うと児童の活動時間がしっかりと確保できた。

マットや跳び箱運動も個人差があり、体育指導補助員との協力による場の設定が増やすことができるため、個別の指導が少なからずできた。

4 成果

体育指導補助員が用具の準備をしたり、運動の場を増やしたりすることで児童の活動時間が増え、十分な運動量を確保することができた。また、個に応じた指導が多くできたことによって児童の運動に対する意欲や技能を向上させることができた。

5 課題

体育指導補助員と担任との事前の打ち合わせや授業後の振り返りを行うことが難しい。打合せの時間を工夫して確保し、連携を深めたい。

体育指導補助員の活用について（萩中小学校）

1 目的

- 児童が仲間と共に運動する喜びや自分の体を思い通りに動かすことの楽しさを味わい、進んで運動に取り組む指導の工夫
- 躓きに対する支援や主体的に取り組める運動の場をできるだけ多く設定し、より多くの動きを経験し、児童一人一人の動きの質の向上を図る。

2 低学年体育における現状と課題

運動経験の違いから、体の動かし方はもちろん、運動に対する主体性や意欲、さらには仲間との関わり方にも大きな差が見られる。運動能力や様々な技能だけではなく、ルールの遵守や関わり方、運動の工夫など、一人一人の児童のもっている力や学習集団に応じた運動場面を設定することによる効果的な支援が必要である。また、発達的な課題のある児童も含め、体の操作がぎこちない児童に対して、安全面の配慮や恐怖心を取り除く工夫をしたり、動き方を示したりして、体を動かしたり操作したりする楽しさを味わわせ、できる限りの質の高い運動経験を繰り返し積み重ねることが、児童一人一人の運動への意欲・技能の向上につながると考える。

3 実践内容

(1) 走の運動遊び

ただ走るだけではなく、体全体をバランスよく使って走れるようになるために曲走路やジグザグ、障害物を置いたコースなど様々な走路を設定した。多くの運動の場が用意され、個の力に応じた学習が保証された。担任がすべての場で声掛けをするには限界があり、体育指導補助員が担任と連携して実態と狙いに合った言葉掛けをすることで児童が大変意欲的に運動に取り組むことができた。

(2) ゲーム

昨年度に引き続き、オンボールスキルの育成と合わせて、オフボールムーブの獲得を目指して、全学級で準備運動と合わせてスポーツ鬼ごっこに取り組んだ。周りの動きに合わせた身のこなしや自分の意図した体の使い方が鬼ごっこの条件設定によって自然にできるように計画的に行った。また、「みんなが楽しめる」という課題設定で運動の仕方を工夫させ、対話的な学習の基礎基本を育む指導の充実を図った。

4 成果

担任と体育指導補助員が連携して指導にあたることにより、より多くの運動の場が展開され、安全面の配慮、つまづきの予想される児童への支援が充実した、学習意欲の向上につながった。体育を専門とする補助員の活用により、児童の実態に適した運動の場（ゲームのコートの工夫、補助的な運動の場、段階的指導の場等）が効果的に活用され、児童一人一人の運動の質が高まった。

5 課題

運動における実態だけではなく、発達的な課題のある児童や特別に支援の必要な児童について、担任と体育指導補助員の間で詳細な打ち合わせ、情報交換が重要である。担任との共通理解を図る打合せの時間の捻出も課題である。

体育指導補助員の活用について（中萩中小学校）

1 目的

低学年の体育における指導の充実と向上を図る。

2 低学年体育における現状と課題

○ 低学年における体育の現状

現在、本校では低学年の体育は1学級、担任一人で行うことが原則である。領域、内容によっては複数の学級を複数の担任が合同で行うこともある。

○ 低学年体育の課題

● 体育用具・場の準備について

担任が児童管理をしながら用具などの準備を行うため、安全管理の面で不安が生じている。また、必要な数の用具などを準備するまでに時間がかかっている。

● 運動量の確保について

担任が一人で一度に把握できる児童の数には限りがある。結果として、児童全体に十分な運動をさせられていない。

● 個別の指導について

学級編成上、30名以上の学級もあり、個別の指導に課題が生じ、個々の児童に十分に達成感を味わわせることができない。

3 実践内容

(1) 水遊び

担任Aが全体指導、Bがプール内指導、支援員Cが監視役で水遊びの指導を行っている際、Bだけでなく体育指導補助員も動きの手本を児童に見せることで、より分かり易く指導を行うことができた。

(2) ボールゲーム

担任が準備運動やゲームにつながる動きについて指導している間に、体育指導補助員がコートラインを引いたり、ボールやゴールの準備をしたりすることで、担任が指導に集中でき、準備等にかかる時間も節約できて児童の運動時間がより確保できた。

4 成果

- 師範・個別指導による、より分かり易い指導が実現できた。
- 用具準備等の補助により児童の運動量の確保ができた。
- 複数の目があるため、安全上の配慮が十分にできた。

5 課題

- 授業の時間だけの配置なので、事前に打ち合わせをする時間が十分に確保できなかった。
- 時間割の都合上、補助員が入れる学級とそうでない学級ができてしまい、均衡が保てなかった。
- 人材の確保が困難であった。補助員を複数回変更することになり、確認作業に時間を要した。

体育指導補助員の活用について（出雲小学校）

1 目的

低学年児童がより体力を向上させることのできる体育科の授業を行うために、授業の円滑な準備や指導補助を行う。

2 低学年体育における現状と課題

年度当初は特に、児童が着替えや整列に時間がかかり担任が児童から離れることができないため、授業前の休み時間に体育の授業準備を行うことが難しい。また、各学級に数名、集団行動が苦手な児童がいて、個別に対応する必要がある。担任が対応している間は、集団の活動が停止してしまう。

3 実践内容

（1）体づくり運動

運動で使うフラフープなどの用具や授業で使う音楽CDデッキなどの準備を体育指導補助員が行った。担任は児童の指導に集中できたため、運動量が確保できた。用具の片付けも依頼することができたため、授業後に担任が児童を連れて移動することができた。児童への個に応じた指導や安全確保も行うことができた。

（2）水遊び

授業で使用するワイヤレスアンプの設置やプールサイドの清掃などを授業前に体育指導補助員が行った。水を怖がる児童への対応で、水の中に入り活動を見守りながら支援を行うことができた。水着の着替えで担任が対応する中、必要な道具の準備・片付けを行うことで指導が円滑に行うことができた。

（3）ゲーム

ボールゲームの際に、ゲームのコートを描いたりボールを準備したりすることを担任と連携しながら進めることができた。個別で練習する場面では、特に配慮の必要な児童を担当し、活動を見守ることができた。体育指導補助員が、片付けを行うことで、担任は指導に集中することができた。

4 成果

担任の行う授業前の準備や授業後の片付けを行うことができたため、担任が児童の指導に集中して取り組むことができた。児童の活動量が確保できただけでなく、安全面でも安定した授業を行うことができた。低学年の担任からは、指導の充実と負担感の減少が報告されている。

5 課題

担任と体育指導補助員との打ち合わせができずに、授業直前に仕事を依頼することが多かった。限られた時間の中で担任と体育指導支援員との打ち合わせを確保することが難しい。

体育指導補助員の活用について（六郷小学校）

1 目的

学校第1・2学年における体育科の授業の改善・充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

運動をすることが好きな児童は多く、休み時間なども校庭に出て元気に遊ぶ姿が見られる。しかし、多様な運動の経験の不足から運動感覚を身に付けていない児童が多く、器械運動系の能力の低下が顕著である。また、運動が得意な児童と不得意な児童とで能力の格差が大きくなっている。そのため、低学年から運動好きになるよう授業の質と運動量を確保していくことが課題である。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使つての運動遊び

ジャングルジムや鉄棒などの固定施設を使い、支持、ぶら下がり、振動、手足での移動、逆さ姿勢、回転など日常生活で普段行われない動きを含んだ運動遊びを行うことで運動感覚を身に付けさせた。

(2) マットを使った運動遊び

適度な柔らかさのあるマットを活用して、背中や腹などをつけていろいろな方向へ転がったり、手や背中で支持しての逆立ちなどをしたりする楽しさを意図的に取り入れた運動遊びを行うことで、支持や逆さ姿勢、回転などの基本的な動きを身に付けさせた。

(3) ボールゲーム

簡単なあてや攻守を交代しながら行うゲームなど、規則が分かりやすいゲームから、児童の実態に合わせてゴールにボールを投げ入れたり蹴り入れたりする攻守が入り交じったゲームに徐々に発展できるようにしていった。

4 成果

- 体育指導補助員の体育に関する専門知識・技能が高くそれをを用いて、示範をしたり児童を補助したりするなど、第1・2学年の体育科の授業を支援することができた。
- 体育指導補助員が授業の準備及び片付けを積極的に行うなど、教員を補助することができた。

5 課題

- 体育指導補助員は授業の準備や片付けを担当したため、中休みに児童と一緒に遊ぶなど外遊びを支援することができなかった。
- 授業を行う教員との打合せの時間を確保することが難しい。

体育指導補助員の活用について（西六郷小学校）

1 目的

児童の活動時間を確保するため、児童の体育的な技能の向上・体力向上を図る。

2 低学年体育における現状と課題

個別指導を必要とする児童が多い。

①全体指導と児童の活動時間、個別指導の時間のバランスをとるのが難しい。

⇒個別指導の時間をたくさんとるために、補助員の支援が必要。

（個別に指導しているときは、全体の安全管理を行ってもらう。）

②教具の運搬やライン引きなどの準備に、時間がかかる。

⇒授業前に準備する。授業中は、児童が準備するときに支援する。

③集団行動をするのに課題のある児童がいる。

⇒補助員に個別に支援する。

3 実践内容

(1) 短縄運動（例. 体づくり運動）

縄の回し方、跳び方、リズムの取り方など、個別指導が必要な場面が多いので、体育指導補助員による個別指導の充実を図る。

(2) ボール投げ・けり遊び

教具の扱い方を個別に指導するときに支援を行う。個別に支援してもらう場合や、担任が個別に指導しているときに全体の安全を管理する。

4 成果

集団行動に対して、支援が必要な児童に寄り添い、一緒に活動してもらうことで、次第に集団の中で活動できるようになってきた。

個別指導を行うことで、苦手意識を克服することのできる児童が増えた。また、技能習得する児童の数が増えてきた。

5 課題

体育指導補助員の方が、授業の内容の理解や指導の意図をすぐに理解してくださる方だと大変心強い。

体育指導補助員の活用について（高畑小学校）

1 目 的 低学年の児童の体育活動時の安全を確保する。個に応じた支援をし、児童に運動する楽しさを味わわせる。

2 低学年体育における現状と課題

本学年の児童の多くは、体育授業アンケートの結果より、「体育の授業がとても楽しい」と感じている。しかし、ボール遊びの経験が少なくなっている現状があるため、ボールに対して恐怖心があったり、苦手意識があったりする児童もいる。

また、体育の授業の中で友達と教え合う意識が低い傾向がある。このような実態から、児童同士が関わり合って運動を楽しめるように、友達の動きに注目させ、教え合ったり、協力し合ったりする機会を増やしていきたい。

3 実践内容

(1) ボール投げ

実演を交えて、ボールを遠くに飛ばすためのポイントを指導できた。1人で行動している児童へのサポートを行いながら、安全確保に留意していた。

(2) かけっこ（走・跳の運動遊び）

50m走タイム測定の補助を行った。児童の安全を確保しながら、スタートの掛け声や合図に合わせて走り出すことを、丁寧に支援していた。

(3) 鉄棒・のぼり棒（器械・器具を使つての運動遊び）

用具の準備や片付け、ライン引き等の環境整備をすすんで行った。児童の安全を確保しながら、授業をサポートすることができた。鉄棒・のぼり棒において、体を支える等の補助を行ったり、声掛けを積極的に行ったりした。

4 成 果

体力テストの結果では、全校的には敏捷性、全身持久力に課題がある。これは、本校の継続的な課題であったが、今年度は、体力合計点で比べると、1年生の男女のみ東京都の平均を超える結果となった。体育指導補助員の活用を今後も継続し、体力の向上を図っていきたい。

5 課 題

体育指導補助員を安定して確保できることが望ましい。児童管理や指導補助について、教員が体育指導補助員を有効に活用するように互いに研修をしていくことが必要である。

体育指導補助員の活用について（仲六郷小学校）

1 目的

地域に学校以外の広い場所がなく、外で遊ぶ機会も少ない。「仲六郷放課後ひろば」と連携を密にして、放課後での校庭や体育館での遊びを奨励している。「仲六郷放課後ひろば」には、高校生をゲストティーチャーに招いて一緒に遊ぶ機会を多く設けて体力向上につながる企画をしていただいている。

2 低学年体育における現状と課題

6月に実施した1年の体力テストでは、「握力」「上体起こし」「長座体前屈」「反復横とび」「20mシャトルラン」など、ほとんどの項目で区の平均を下回った。保育園や幼稚園での遊びの経験値が低く、個人差が児童によって大きく、走る・跳ぶなどの運動遊びで技能を高める指導をしなければならない場面が多い。また、体のバランスを保つ動きが苦手な児童も多く見られる。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使つての運動遊び

1つの器械・器具を集中して指導するのではなく、様々な場の設定（ジャングルジム・雲梯・上り棒・鉄棒など）をして、グループで楽しみながら動きを習得できるようにした。それぞれのコーナーに教員と体育補助員を配置し、体を支える補助をしたり、助言をしたりして、児童が安心して取り組めるようにした。

(2) ゲーム

1対1でゴールを守らせてボールを捕ったり止めたりする場面（シュートゲーム）を多く設定したり、ボールへの恐怖心をなくすために柔らかいボールを用いたりして、楽しみながら「投げる」「捕る」という動きを高めるようにした。さらに、相手コートにボールを投げ入れる簡単なルールで行える易しいゲームをして、勝つために友達と協力することの大切さを理解させた。

4 成果

1・2年の体力テストの「ソフトボール投げ」の項目では、区の平均を上回った。ボールゲームへの関心が高まり、投げたり、捕ったり、止めたりする動きが高まってきた。様々な場の設定を工夫したことにより、児童は主体的に活動するようになり、多様な動きが身に付き、運動量が増えた。

5 課題

生活指導上の安全の問題から、ボールを使える部分が校庭の半分で、学年で20分休みと昼休みで交互に使用することになっている。児童は、ボールを使つての遊びが少なく、鬼ごっこなどの遊びが多くなっている。さらに、体育の授業以外にも、投げる力を伸ばすために、ボールを使つて遊べる環境を整備していくことが課題である。

体育指導補助員の活用について（志茂田小学校）

1 目的

専門性の高い体育指導補助員を活用し、担任と連携を図ることで、児童の体力向上や運動技能の向上に努める。

2 低学年体育における現状と課題

児童の発達段階の差や幼児期の運動経験の差が大きく、運動能力に大きな差がある。この運動経験の差を無くすために、児童が成功体験を得られやすい課題、場や用具の設定が大切である。しかし、担任だけの指導だと、場の設定を児童と行うことは、時間がかかることや安全管理上危ないものがある。また、担任だけで場の設定を行ってしまうと「その間の指導がされない。安全管理ができない。」というのが現状であり、課題でもある。

3 実践内容

(1) 器械・器具を使っでの運動遊び

マットを使った運動遊びでは、補強の運動を行っているときにマットの準備（苦手な児童が勢いよく転がれるような傾斜の場）をしてもらった。体育専門の先生ということもあり、苦手な児童一人一人にあったアドバイスや補助を行った。

鉄棒を使った運動遊びでは、回転運動を行うときに怖がる児童に対して、バスタオルを使って、お腹と鉄棒が離れないように結び、握ってあげることで鉄棒から落ちてしまう恐怖心を抑えることや台などを準備し指示や跳び上がりやすい場を用意した。

跳び箱運動遊びでも、場の準備をしていただいている。苦手な児童に対して、適切な助言と課題を明確に指導した。

4 成果

場の準備や片付けにかかっていた時間を運動する時間に充てることができたことにより、一人一人の運動量を確保することが出来た。

苦手な児童に対して、個別指導を行えることや声掛けがしやすくなった。そのことにより、児童がより明確な課題をもって体育科の学習に取り組むことができた。また、中学年や高学年につなげるための基礎的な動きを学ばせることができた。

5 課題

体育指導補助員の方と授業準備の確認ができない。そのために、授業後に次の授業の打合せを短時間で行う必要があることが課題である。

体育指導補助員の活用について（東六郷小学校）

1 目的

- ・小学校第1・2学年における体育科の授業の改善・充実を図る。
- ・運動することが好きな児童を育成する。

2 低学年体育における現状と課題

1・2年生の児童の多くは、身体を動かすことが好きであり、体育への関心も高い。体ほぐしの運動や体づくり運動などの学習活動の中で、体育科の学習のきまりや日々に活用できる集団行動を学んでいる。簡単なゲームを通して、ルールを守って安全に楽しく学習することを学んでいる。

課題は、用具の準備片付けに要する時間がかかることや安全面への配慮である。児童のみでは準備や片付けが難しく、時間を要してしまう。安全かつ迅速に準備や片付けし、児童の運動量を確保することが必要である。また、生活の中での運動経験が少ないため、個に応じた支援を行い、児童が様々な運動遊びで体を動かす経験をさせる必要がある。

3 実践内容

(1) 固定施設遊び・鉄棒

固定施設（うんてい、登り棒等）の活動では、安全のため運動の補助をしたり、個別に運動の仕方を指導したりした。実技の手本を示すことで、児童が具体的に体の動きを捉えることができた。児童の学習意欲が高まり積極的に取り組んだ。足の伸ばし方や肘の使い方など、的確な指導を行った。

(2) マット運動あそび・とび箱あそび

前転や後転で上手に転がれない児童の補助や、とび箱を跳び越える際の補助を行った。また、児童に転がり方や跳び方を指導するための手本を示し、身体の動きを児童に視覚的に捉えることができた。マットやとび箱などの準備、片付けの際に、教員の補助と児童の安全確保を行った。

4 成果

安全かつ活動的な授業展開にすることができた。児童に、手本を見せることで、運動のイメージをつかむことができ、児童がより意欲的に体育に取り組むことができた。担任のほかに、体育指導補助員がいることより、個に応じた細やかな指導を行うことができ、一人一人の運動能力の向上が見られた。

5 課題

体育指導補助教員は時間講師のため打ち合わせ時間が十分に確保できなかった。結果、授業時間内に補助内容を伝えることが多かった。予め授業内容、指導補助の要点等を確認しておき、授業の補助を行えると、より効果的な体育指導補助員の活用ができたと考えられるため改善したい。

体育指導補助員の活用について（南六郷小学校）

1 目的

- ・体を動かすことが楽しいと思う気持ちを育てる。
 - ・色々な技（遊び）を知り、やってみようと思う気持ちを育てる。
 - ・友達と一緒に関わって体を動かす機会を増やし、コミュニケーション能力を高める。
- 以上のことができるように、体育指導補助員と教員が連携して指導にあたる。

2 低学年体育における現状と課題

1学級の人数が多く、児童の安全の確保や技能を向上させるという面が難しい。体を動かす機会が少なくなっていることや自分のボディーイメージができていないので、けがをする児童が多い。

3 実践内容

(1) 体力テスト

体力テストの受け方についての指導をしてもらった。力をいっぱい出せるように、手の振り方・息の仕方などをアドバイスしてもらった。また、友達との補助の仕方も指導してもらい、励まし合いながらテストができた。

(2) 固定施設・鉄棒遊び

どのようにして鉄棒を握るのか、足が地面から離れる恐怖心を取り除けるような遊びを紹介してもらった。また、様々なゲームを紹介してもらい、児童が楽しみながら試すことができた。

(3) ゲーム

用具や場所を工夫しながら、色々なボール投げゲームができた。安全なボールの捕り方も指導してもらった。遠くへ投げるには、どのような投げ方をすればいいかを教えてもらった。

4 成果

- ・準備、片付け等を手伝ってもらえるため、指導が途切れることなくできた。
- ・うまくできない児童に対して、個別に指導をしてもらったことでできるようになった児童もいた。
- ・安全面で多くの目があり、安心して指導ができた。

5 課題

- ・事前に打ち合わせがなかなか取れないことが多いので、打ち合わせの時間を確保することが重要である。

体育指導補助員の活用について（矢口小学校）

1 目的

各運動領域で、より専門的に指導・助言をすることで、児童一人一人の運動技能の向上を目指す。

2 低学年体育における現状と課題

体育には、全体的に意欲をもって取り組んでいるが、技能面で個人差がある。

3 実践内容

（1）マット運動遊び

- ・補助員による手本や動きのポイント指導。
- ・練習に児童への個別の声掛けや技能面の指導。
- ・児童と共にマット遊びに参加し、活動する。

（2）鉄棒運動遊び

- ・補助員による手本や動きのポイント指導。
- ・練習に児童への個別の声掛けや技能面の指導。
- ・児童と共にマット遊びに参加し、活動する。

4 成果

マット運動では、うまく前転ができない児童に対して、個別に丁寧に指導を行うことにより、ポイントをつかみ前転ができるようになった児童も多い。また、体育指導補助員の手本を見ることにより、マット運動に興味・関心を示す児童も多く、意欲的に活動することができた。

鉄棒運動では、跳び上がりや跳び下り、ぶら下がり、易しい回転など恐怖心によってなかなか技ができない児童に対して、個別に指導を行った。その結果、恐怖心がなくなり、意欲的に鉄棒に取り組む児童が増えた。

5 課題

体育の授業を予定していたクラスが都合によりできなくなったことが伝わっていなかったときがあった。連絡を忘れず、学年（担任）と体育指導補助員による事前の打ち合わせ等を行う時間があるとよかった。

体育指導補助員の活用について（矢口西小学校）

1 目的

1学年は4学級で1学級の児童数は30名、2学年は3学級で1学級の児童数は34名で1学級ある。体育の授業では準備・活動・片付けで、広範囲に児童が活動するため担任1人だと目が届かないことがある。

体育指導補助員の活用により、準備・片付け・個別支援で補助をしていただくことで、担任は体育の指導に集中して、授業を円滑に進め活動の質を高め指導内容を充実させる。

2 低学年体育における現状と課題

よく身体を動かして、楽しく運動に取り組んでいる。安全確保、準備・片付け・指示の時間の短縮、基礎技能の定着、運動量の確保、要配慮児童の支援が課題である。

3 実践内容

(1) ボール蹴り運動

サッカーボールを使いどうすればまっすぐけることができるか考えて段ボール箱の的当てゲームをする。足のどの部分に充てるか、どのくらいの強さで蹴るか、蹴り方の工夫をする。体育指導補助員はボールの準備片付け補助、的の段ボールが動いたら元の位置に並べることを手伝い、ゲーム中個別支援が必要な児童の支援を行う。

(2) 跳び箱あそび

跳び箱を使って飛び乗りや飛び下り、馬跳びなどをして楽しく遊ぶ。順番や決まりを守り仲良く運動し、運動する場所や器械・器具の安全に気を付けて活動する。

いろいろな跳び箱あそびの行い方を知り、簡単な遊び方の工夫をする。跳び箱の準備片付け補助、跳び箱あそび中の安全補助に入る。

4 成果

体育指導補助員の活用により、準備・片付け・個別支援の補助により、担任は全体指導、個別指導、体育の実技指導に集中して取り組むことができた。授業を円滑に進め指導内容を充実させることができた。

5 課題

体育指導補助員の確保が課題である。限られた曜日、時間のみ来ていただいているので、入る学級、入らない学級がある。担任と事前の打ち合わせをする時間がなかなかとれない。

体育指導補助員の活用について（多摩川小学校）

1 目的

- ・ 1・2年生の体育科の授業の改善や充実を図る。

2 低学年体育における現状と課題

本校は、伝統的行事として「持久走大会」を実施している。昨年度から持久走に取り組む期間を長く儲け、より継続的に持久力をつける取り組みを行ってきた。これにより、スポーツテストでの「シャトルラン」の結果は、昨年に引き続き区の平均を上回っている。また、投球能力を高めるために休み時間に投球練習ができる場所を設けたり、体育授業におけるバドミントンのシャトルを使った投球練習している。その結果、「ソフトボール投げ」の結果も向上しつつある。その他のスポーツテストの結果からみると「上体おこし」「長座体前屈」「握力」の数値が低い。筋力や柔軟性を高める運動を行う機会を高めていきたい。

3 実践内容

(1) 体づくりの運動

校庭芝生を活用した運動・・・ゲームを通して敏捷性や柔軟性を養う運動

「校庭アスレチック」「しっぽとりゲーム」「宝とり鬼ゲーム」

「はだしスキップ」「芝生で転がろう（前回り・転がる）」

(2) ボール遊び

① ボールけりゲーム

脚を使って止める、蹴るなどの簡単な技能を身に付け、的あてゲームやシュートゲームをして技能を高める。

② タグラグビー

基本的なボールの投げ方、取り方を身に付けた後、ゲームをして楽しみながら技能を高める。

4 成果

本校では、体育指導補助員年間 200 時間分の配当を受けることができた。体育の指導にも優れた能力を身に付けた補助員を任用できたため、グループに分かれての運動では、担任と共に個別の指導を行い安全に配慮し、個々の能力に合った支援を行うことができた。体育の授業前に補助員が安全確認を行い、体育器具の準備を行った。これにより、担任は、児童に運動の目的や注意事項等を丁寧に伝える時間がもて、安全でかつ児童の運動量を確保した体育の授業を行うことができた。

5 課題

能力の高い補助員の人材確保が課題である。

体育指導補助員の活用について（相生小学校）

1 目的

低学年の児童に運動することの楽しさを味わわせ、意欲的に運動する態度を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

本校は、運動や体育の学習を好んで行う児童が多いと感じる。どの活動も意欲的に取り組む姿勢が見られ、楽しんで体を動かしている。低学年においては、これまでの運動経験の差が大きく、運動の内容や領域による好き嫌いが見られることが課題だと感じる。体育の学習を通して、児童の「もう少しで、できる。」「できた。」「もっとできるようになりたい。」という体験が増やし、運動する楽しさにつなげていきたい。

3 実践内容

(1) かけっこ（走・跳の運動あそび）

かけっこをするときに、視線は自分が走る先を見ることや腕をしっかり振ること、足をまっすぐ下ろして膝を素早く動かすことなど、視点を明確にして児童に指導を行った。そのため、児童は真っ直ぐなコースやくねくねしたコースなど、いろいろな形状の線上でも、走り方を意識して楽しく活動することができた。

(2) 跳び箱あそび（器械・器具を使つての運動あそび）

跳び箱あそびにつながる感覚遊び（かえるの足打ちや馬跳び）などを導入で取り入れることで、跳びこえることへの恐怖心を取り除き、跳び箱あそびへつながることができた。また、多くの場を設定することで、児童がやってみたい場を選び、意欲的に取り組むことができた。体育指導補助員がいることで、児童の安全面も確保することができ、器具の準備や片付けを児童が率先して行うことができた。

(3) マットあそび（器械・器具を使つての運動あそび）

いろいろな場を設定することで、マット運動を苦手とする児童も進んで活動に取り組む姿が見られた。また、できる児童に対して、動きの質を高めるために、手の着き方や頭の入る方、足の着き方などのポイントを示すことで、児童は意識して取り組むことができた。

4 成果

体育指導補助員がいて児童の安全の確保や、用具の用意・片付けの時間確保ができたことで、担任に児童の細かな動きの指導を行う余裕が生まれた。そのおかげで、児童の「もう少しでできそう。」「できた。」「もっとできるようになりたい。」などの意欲的な声が挙がるようになり、より主体的に学習に取り組むことができるようになったと感じる。また、器具を使う学習においては、安全面を十分に確保することができ、様々な工夫を取り入れた場の工夫ができた。

5 課題

授業前に、担任と体育指導補助員が打ち合わせをする必要がある。授業中の役割分担をするために必要であると考えますが、打ち合わせの時間を確保することが難しい。

体育指導補助員の活用について（矢口東小学校）

1 目的

低学年の体育の授業において、安全を確保しながら個々の学習課題を解決するための運動量を増やす。

2 低学年体育における現状と課題

教室とは異なる校庭、体育館、プールでのルールに対応することが困難であったり、時間が掛かったりする児童がいるため、個別の言葉掛けや活動のペースに合わせた見守りが必要である。

3 実践内容

（1）器械・器具を使っでの運動遊び

鉄棒や雲梯等の固定施設を使った運動遊びでは、個々の課題に応じた運動をすることが多いため、学級担任と体育指導補助員が実施している児童の運動に応じた安全管理、実施していない児童の安全管理を分担して展開した。

（2）水遊び

水遊びに関しては、個々の経験の差が大きいため、単位時間内に一斉指導と級別指導を実施している。担任と体育指導補助員が、一斉指導では個別指導が必要な児童に直接指導を行い、級別指導では複数の級の児童を集めて指導を行った。

（3）ゲーム

全員が規則を守ってゲームができるように、担任と体育指導補助員が審判や審判の補助をした。また、場の安全を確保しやすい環境を整え、児童に対して場の安全に気を付けるための注意喚起をした。

4 成果

体育指導補助員が学級担任と一緒に準備や片付け等を行うことができるため、環境を整える時間が短縮され、児童の運動量が確保しやすくなった。

5 課題

安全管理については、個別に対応する必要のある児童が複数いるため、確実に対応できるように、時間割の調整や人員の確保等による体育指導補助員の割り振りが必要である。

体育指導補助員の活用について（おなづか小学校）

1 目的

- 体力調査の結果から課題となった柔軟性と筋力の向上に加え、跳・投の技能の向上を図る。
- 児童の運動への興味・関心を高め、生涯スポーツへの意欲を培う。

2 低学年体育における現状と課題

1年生は、就学前の経験によって運動能力に差がある。その状態で1年間体育授業を受けた2年生は、意欲の面で少しずつ差が見られてくる。また、低学年児童は運動経験が少ないため思ったような動きができず、技能面において意欲が低くなることがある。

低学年体育においては、多様な運動に楽しく取り組ませることが課題である。また、全学年において、創意工夫のある楽しい体育授業を行うことが課題である。

3 実践内容

(1) 体づくりの運動遊び

低学年の運動の際の体の動きが、担任と体育指導補助員の2名の指導により、個別指導の時間が増え、児童の意欲につながられた。また、児童の動きが良くなった。

2年生での折り返し障害物リレーの学習において、チームで障害物を置く位置を相談したり跳び方を練習したりする際、補助員が話し合いに参加し助言したり声をかけて練習したりした。この支援により、時間を効果的に使うことができ、新記録をつくるという目標に向けて児童の意欲を持続させることができた。

(3) ゲーム

1年生では、様々なゲームでのルールを理解し守ることが難しい場合があるが、担任と補助員の2人体制により、ルールを確実に児童に理解させることができた。

(4) 表現リズム遊び

入学して間もない6月の運動会に向け、1年生は表現に取り組んだ。その際、担任が創作したダンスの指導に補助員が積極的にかかわって指導したり師範したりすることで、多くの児童が自信をもって楽しく取り組むことができた。

4 成果

低学年体育では、場の設定、用具の準備を指導者が全てしなくてはならず、時間がかかるため運動量が減る。補助員が準備を行うことで担任が指導する時間が増え、運動量の確保ができた。また、2人体制によるきめの細かい指導によって技能の向上等、成果が得られている。

5 課題

体育指導補助員に適切な人材を確保することが課題である。

体育指導補助員の活用について（道塚小学校）

1 目的

- 体育授業の充実により、運動好きの児童を育て、運動する習慣を身に付けさせる。
- 運動の苦手な児童にもできるようになった喜びを味わわせることにより、苦手意識を克服して運動に親しめる児童を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

1・2年生の体育は、意欲的に取り組んでいる児童が多く見られる。今年度実施の体力テストにおいては、1年生が全体的に好成績であったが、就学前の経験の際による個人差もあるため、個別に対応する必要もある。また、用具の準備や片付けに時間がかかり、1時間あたりの運動量を確保することが課題である。

3 実践内容

(1) 長縄跳び

「一校一取組」運動として取り組んできた。各学級に縄を3本配布して1学級3チームとし、1チームの人数を減らすことにより一人あたりの運動量を増やすことができた。また、体育朝会を月1回実施し長縄に取り組んだ。やり方を新たに身につける必要がないため、体を動かす時間を多く確保できている。各学期の最後は「長縄大会」とし、各学級で記録の更新を目指した。これらにより、運動量も増え、また、記録更新を目指して、朝練習に取り組む学級もあり、多くの学級で記録が大幅に伸びた。しかし、低学年では運動経験の差が大きく、なかなか縄の中に入れない児童もいた。体育指導補助員には、入るタイミングで声をかけてもらう等の補助をしてもらうことで、跳べるようになる児童が増えた。

(2) 体づくり運動

校庭や体育館の固定施設を使った運動遊びに取り組んだ。事前に固定施設の点検を行うことで安全に学習をすすめることができた。

4 成果

- (1) 安全確保の点で有効であった。慣れてくると児童の注意は散漫になり、負傷の恐れがあるため、体育指導補助員が常に状況を見て声掛けすることで安全に学習をすすめることができた。
- (2) 用具の準備等を体育指導補助員が担うことで、教員は授業時間の多くを児童の活動にあてることができ、運動量の確保ができた。

5 課題

体育指導補助員の確保が課題である。非常勤職員に兼務してもらったが、勤務日数・時数の制約があり、最大限に活用できなかった。

体育指導補助員の活用について（南蒲小学校）

1 目的

- (1) 体育学習において児童一人一人の個別の課題に応じて支援ができるようにする。
- (2) 低学年児童に運動する楽しさを味わわせるとともに、運動に対する意欲を育てる。

2 低学年体育における現状と課題

- (1) 1・2学年の体育の授業では、集合・整列・説明の時間、使用する用具や器具の準備等に多くの時間が必要である。
- (2) 体力テストは、男女ともほぼ全国平均レベルであるが、男女とも投力、女子はさらに柔軟性に低い傾向が見られる。
- (3) 低学年の児童は、純粋に運動に関心が高く、体育指導補助員を効果的に活用し、運動の楽しさを体験できるよう場の設定に工夫していく。

3 実践内容

(1) 水遊び

入水のルール of 指導を担当と一緒にいった。水に対して恐怖心のある児童に個別に対応することにより不安が軽減し、スムーズに入水することができるようになった。個別指導では泳力が高いコースを担当と担当し、クロールの息継ぎ、平泳ぎの蹴るタイミングなどをアドバイスし、技能を向上させた。

(2) 器械を使った運動遊び

跳び箱やマットを使って運動する場面を多く設定した。跳び箱遊びでは両足跳び、ひねり跳びなど児童の跳び方に応じてアドバイスをすることができた。マット遊びでは、前転が上手にできない児童に対して示範して見せるなど具体的に指導することができた。また、準備や片付けに時間をとられず、運動量が確保できた。

(3) なわとび運動

「短縄とび」では縄跳びカードを用いて児童の実態に合った跳び方をアドバイスすることができた。「長縄跳び」では縄に入るタイミングを示範したことによりスムーズに縄を跳ぶことができるようになった。また、練習する際は、担任グループと体育指導補助員グループに2つに分かれて練習することにより、児童の跳ぶ回数が増え、運動量が確保できた。

4 成果

- (1) 体育指導補助員を活用することにより、児童の安全確保と同時に用具の準備・片付けにかかる時間が軽減されたため運動量も確保できた。
- (2) 体育指導補助員を活用することにより、学習の場の数を増やすことが可能になり、個に応じた運動を行うことができた。

5 課題

学習内容の事前連絡の方法、指導方法の共有などが課題である。

体育指導補助員の活用について（新宿小学校）

1 目的

体力向上プログラムを基に、芝生の校庭、第二校庭がある環境等を生かし、体育科学習の充実を図る。児童が自ら進んで運動に親しむ態度を育み、身も心も「元気な子」を育成する。

2 低学年体育における現状と課題

- ・保育園・幼稚園期における運動経験の差異が大きく、自ら進んで運動に親しむ児童と、運動を好まない児童とで二極化傾向にある。
- ・運動感覚を十分身に付けておらず、器械運動系の能力（腕での支持、回転、逆さ、ぶら下がり、振動など）が低い児童がいる。
- ・配慮を要する児童が増え、運動系の能力が低い児童と併せて手厚い支援が必要である。

3 実践内容

- (1) 体づくりの運動遊び 多様な動きを作る運動遊び
 - ・用具の準備、学び方の確認、技の模範、要配慮児童への個別指導
- (2) 水遊び
 - ・用具準備、補助、運動が苦手な児童に対する個別指導
- (3) ボール投げ遊び
 - ・運動が苦手な児童に対する個別指導、補助運動を通した運動感覚づくり
ボール感覚づくりの実演、技の模範

4 成果

- ・運動に親しむ児童だけでなく、運動が苦手な児童の意欲が向上し、休み時間に外に出て体を動かす児童が増えた。
- ・体育指導補助員が、用具や場の準備・片付けを担当することで、指導時間を最大限活用することができた。
- ・指導者の運動経験に拠ることなく、模範指導や技術指導ができた。
- ・配慮を要する児童への支援が充実した。

5 課題

- ・配慮を要する児童の指導内容について事前に十分に打ち合わせができなかった。放課後などに打ち合わせを行えるような時間を確保することが課題である。

体育指導補助員の活用について（東蒲小学校）

1 目的

- ・運動量を確保し、児童の体力向上を図る。
- ・成功体験を味わわせ、きまりを守ること、友達と協力することを通して良好な人間関係を構築していく。

2 低学年体育における現状と課題

新体力テストの結果を見ると、長座体前屈、立ち幅跳び、ソフトボール投げなどがそれぞれの学年で全国平均を下回っているものが多い。柔軟性や瞬発力、踏力を高めていきたい。

また、運動中に正しい判断をしたり、仲良くしたりすることができない場面があるので、きまりを守ることや仲良く運動する態度を身に付けさせながら体力を向上させていくことが課題となっている。

3 実践内容

(1) 体づくり運動

鉄棒やマット運動では、児童を少人数に分けて指導することができた。人数が多いと支援の必要な子や苦手意識の強い子に目配りがしにくくなるが、様子を見ながら声をかけてもらった。

(2) 水遊び

水に対しての苦手意識が強い児童に付いてもらい、児童に安心感をもたせながら指導することができた。また、安全性も高まった。

(3) 跳び箱遊び

跳び箱の準備やマットの出し入れに入ってもらうことで、安全面と共に素早く準備を終えることができた。そのため、運動時間を確保することができ、運動量増加につながった。

4 成果

- ・安全面で効果があった。
担任と二手に分かれられるので、用具準備や片付けを安全に行うことができた。
- ・運動量の確保
技能ポイントを抑えながら個別に声をかけてもらえるので全体を集める回数が減った。
そのため、運動時間を長くすることができた。

5 課題

- ・運動に苦手意識がある児童に補助員が個別に指導する際、運動遊び程度はできるが、授業のねらいに沿った運動をさせることは難しかった。打ち合わせ等の時間確保が必要である。